
黒の魔法使い

ハルシオン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒の魔法使い

【Nコード】

N8008U

【作者名】

ハルシオン

【あらすじ】

魔法には色があり、「赤」「青」「緑」「黄」の四色の魔法によって世界は巡っている。

そのどれにも当てはまらない白色の魔法使いは世界に大いなる恵みをもたらし、

闇に落ちた黒色の魔法使いは世界を破滅に導く悪い魔法使いなのです。

ところが、私は悪役がいつも闇属性なのってもう飽きちゃったんすよね！

そこで闇の魔法使いを主人公にしてみたりしちゃったんすよね

1・「赤と黒」

1・

「ついにこの日が来たか」

ここはとある大陸の魔法学園。

火や天候を操ったり、

空を飛ぶための魔法を習い、

一人前の魔法使いを目指す若者たちが集まる学び舎。

桃色の花を咲かせた木々の脇を、新調したてのローブを着た生徒たちが列を成して歩いてくる。

長机に掛けてその様子を眺める在校生の一人がつぶやくと、右隣に座る女子生徒が尋ねた。

「どうしたのフレッド君？」

フレッドと呼ばれた男子生徒は目線を外さずに返事をする。

「ついにこの日が来たんだよ」

ツンツンに逆立てた黒い髪。

赤い瞳をギラギラとたぎらせ、口元をニヤつかせながら新入生を見つめる彼を見て、

今度は左隣に座っていた女子生徒が口を挟む。

「いたいけな下級生に手を出すつもりね、きつと」

魔法学園の男女比率は1：99で圧倒的に女子が多い。

なぜなら魔法を使うために必要な魔力は、基本的に女性にしか宿らないから。

すなわち、魔法学園に入学してくる生徒もおのずと女子が多くなる。

「まだ魔法を上手に扱えない女の子にやさしく手ほどきをして信頼を得る。」

やさしい上級生のお姉さま、生意気な同級生、俺を慕ってくる一年生。

俺の野望は女子に囲まれたバラ色の学園生活を送ること。

そして真の野望は学園生活を終えた後、

この学園の教師となって女子生徒のハーレムを作り上げることだあ
！」

「声に出てるよ」

机をはさんだ向かい側の生徒からもつつこみをもらった。
もちろん女子だ。

などと騒いでいるうちにいよいよその時がきた。

教師がプリントを見つめ、二年生と新入生の生徒の名前を一人ずつ読み上げる。

バディシステム。

魔法使いの教師不足問題を解消するための措置で、学園側が教鞭を振るう授業とは別に二年生が一年生をマンツーマンで指導する時間がある。

フレッドの口元がより一層ニヤつく。

彼は一年生女子とバディを組むこの瞬間を待っていた。

バディには特別な意味がある。

組んだ二人は寮の部屋は隣同士で公私共に助け合っていかなければならない。

ほとんどは女同士だが、男と女の組み合わせとなってもシステムは変わらない。

その結果組んだ者同士で結婚した、なんて話もちらちら出るほどだ。

「21組アイリーフと、14組エルザ。

23組サイダーと、13組サラサ。

26組モカと、15組メローネ」

次々に名前が読み上げられ、バディを組んだ者同士で挨拶を交わしていく。

そして

「23組フレッドと、16組シロ」

フレッドの前に来たシロと呼ばれた生徒はとてもおとなしい。

黒髪ショートに淡いブラウンの瞳。

緊張しているのか目線を合わせずもじもじしている。

背はフレッドの肩ほどにも届かない。

ローブの上から胸や尻に目を配るも、どうやら発育は遅れているようだ。

フレッドの好みからは多少かけ離れてはいるが、正統派の妹系という感じで不可ではなかった。

これから一年面倒を見てあげる大切な後輩。

フレッドは期待と興奮に胸を躍らせながらも今はそれを押し隠し、シロに手を差し伸べる。

「2年のフレッドだ。これからよろしくな」

その手に向かって、シロも手を伸ばす。

「はじめまして。僕、シロって言います」

こうして二人は触れ合った。

握りしめた手は小柄な体格に似合わず肉付きが良い。

シロの声も周りの女子に比べて少し低めで、僕という一人称と合わさってまるで少年のような印象を与える。

寮に戻ったフレッドは、シロの荷造りの手伝いをしていた。
明日からの授業にあわせて身の回りの整理を早く済ませてあげる。
これも先輩としての大事な務めである。

「その箱は下着とか入ってるんでこっちに持ってきてください」
シロのこの言葉に、段ボールにかけた指が固まる。
フレッドの脳裏をかすめる悪魔のささやき。
次の瞬間、彼は”思わずつまずいた感じ”を装いその箱を盛大にひ
っくり返してしまう。

フレッドは青き布を被り、金色のお花畑に降り立った。

「大丈夫ですか？」

慌てて駆け寄ってきたシロと目が合った。

フレッドはそこで目が覚めた。

箱をひっくり返して床に撒き散らされた下着は、色とりどりのトラ
ンクス。

その衝撃で頭に乗った青い布は、まさかのブーメランパンツ。

しばしの沈黙があった。

その後、フレッドは頭に被さったパンツを丁寧に折りたたんで床に
置き、一度だけ深呼吸をした。

そして声と肩を震わせながらシロに今一度尋ねてみた。

「男の子ですか？」

「はい、男です」

シロの笑顔が眩しかった。

立ちくらみを起こしそうになるフレッド。

生まれたての小鹿のような弱々しい足取りでなんとかふんばり、渾身の力で再度聞き返す。

「聞いてないよ？　こんな話」

「はい、僕も男の先輩と組ませてもらえるなんて聞いてなくて光栄です。」

これから一年よろしくお願いしますー！」

今日一番の笑顔でシロが歓迎してくれた。

だがフレッドの心には最大規模の雨雲が近づいてきていた。

こうして、

フレッドとシロのバディ結成初日の夜が更けていくのであった。

続く。

2・カレーライス

2・

魔法使いは大きく四つのタイプに分けられる。

分類方法として最も一般的なのが四種類のカラーになぞらえた方式。「赤」「青」「黄」「緑」の四色に分けられ、色によって覚える魔法が違ってくる。

バディとなった二人は昼食も食堂で並んで食べる。

2年生で「赤」のフレッドと組むことになった新入生のシロ。

カレーライスと福神漬けを乗せたスプーンを口に運びながら機嫌よくしゃべる。

「この学園、女の人ばかりで少し不安だったんです。

女性が苦手で上手く付き合えなくて。

だからフレッド先輩とバディが組めて本当にうれしかったんです」

「フーン、ヨカッタネー」

箸でうどんをかきまぜながらフレッドは生氣なく返事する。

一晩たっても表情は晴れない。

シロは悪気無く質問する。

「元気ないですね。寝不足ですか？」

フレッド、若干不快指数を高めながら返す。

「昨日はどうせ寝不足になる予定ではあったんだよ。ただ寝不足になる理由ってのがちよつと変更になっただけで」

シロ、少し考えた後におずおずと聞き返す。

「もしかして、男の後輩と組むのはいやでしたか？」

フレッドの箸が止まり、ようやくシロと顔をあわせた。

「ていうかなんだよあの大量のトランクス。20個くらいあっただろ。」

そしてなんで一枚だけブーメラン？」

「あれは海パンです。僕泳ぐの得意なんです」

フレッドの頭に浮かんでくるイメージ。

それはシロの顔をした女子生徒と一緒に海に行く物語。

二人きりで海辺で遊び、気がつくと足が届かないくらい深い場所まで来ていて。

その時シロの顔をした女子がフレッドに抱きついてくるのだ。

「私、およねいんです。先輩助けて」

涙目になって懇願する後輩は溺れまいと必死にフレッドの腕にしがみつく。

胸の感触を楽しむことはできないが、肌と肌の密着によってお互いの心臓の鼓動まで聞こえてくる。

荒い息遣いが伝わる。

そして二人は…

以上、すべてフレッドの妄想。

都合の良いイメージを押し付けてみても、目の前にいるのはもちろん海水パンツを愛用する男の後輩。その事実は変わらなかった。

「こんなの絶対おかしいぜ…」

フレッドは少しだけシロからイスを遠ざけてうどんをすする。

するとシロがいる逆方向からの熱い視線。

振り向くと、そこには金髪ストレートの美少女がフレッド達を見つめていた。

またも箸が止まる。

「どーも！ 私14組のエルザ。黄色の魔法使いです」

元気な声と笑顔でハキハキと自己紹介。

エンジェル（天使）かと思った！ とはフレッドの後日談である。釣られて二人も自己紹介。

「俺はフレッド。赤だ」

「えっと、シロです。色はまだ決まっていなくて…」

まだ状況をよく飲み込めていない。

シロにいたってはカレーライスが口の中に残ったままだ。そんな二人を舐めるように見比べる美少女エルザ。

腰にまで届くブロンドは触るまでもなくしつとりさらさらで、しかし毛先は羽織ったローブに刺さりそうなくらい細く鋭い。

うどんをちゅるんとすすり、フレッドが優しい声で切り出した。

「バデイの上級生はどうしたの？」

そういえば！

…とシロが声に出すよりも先にエルザは言う。

「邪魔だから置いてきました。」

それより私、『緑』以外の二年生を探してたんですよ！

よかつたら私のバデイになってくれませんか？」

「よろこんで」

フレッドの決断は矢のように早かった。

しかしシロが全力でそれを阻止し、まずは事の経緯を聞く。

エルザの言い分はあっちこっちに話が飛んで判りにくかったのだが要点だけかいつまむと、教師によって決められたバデイに不満を持つ生徒はここにもいるという話であった。

「なんで緑がいやなんです？」

シロはなぜか直接エルザには聞かず、フレッドに尋ねた。

「黄色の魔法使いは緑の魔法使いに弱い相性だからな。上級生にいばれるのが嫌だった、てところじゃないか？」

その回答にエルザはうんうんと頷いて答えた。

「それもあるしー。」

その緑のバディも女子なんですよー。

やっぱり貴重な学園生活を送る上で、男子と素敵な恋愛とかしたいじゃないですか」

「うん、同感だ」

またもフレッドの相槌は素早かった。

こうして二人は見つめあう。

そして互いに惹かれあつていく。

この先どんな苦難の道が待ち受けていようと二人ならきつと乗り越えられるだろう。

フレッドとエルザ。

愛し合う二人に祝福あれ。

以上、またもフレッドの妄想。

自分勝手なそのイメージは、現バディのシロの横槍によってテーブルの下に押し退けられた。

「そんな勝手をされたら困ります。

フレッド先輩は僕のパートナーなんですから」

冒頭に話していたとおり、シロは女性と話すのが苦手。

エルザが来る前も来てからも彼は基本的にフレッドとしか目を合わ

せていないし話もしていない。

フレッドはシロのことをそういう態度も含めて気に入らなかった。
「うるさいな。」

こんな可愛らしい女の子とお前を並べたら、男はみんなエルザちゃんを選ぶね」

と思わず本音がこぼれる。

後ろでエルザがきゃーと小さく黄色い声を上げる。
ふくれるシロにフレッドは追い討ちをかける。

「お前にとっても女と組めるチャンスだろ。」

一生女とまともにしゃべれないままにいる気か？」
そしてエルザからの提案。

「それじゃ魔法使いとして、公正に魔法勝負で決めようよ。
私が勝ったらバディ交換ってことでいいよね」

この案にフレッドも乗る。

ここまでくるとシロにはもう戦う以外道は残されていない。
冷めかけのカレーライスを片付け、移動する二人の後ろについていくよりしうがなかった。

「ふっ、このエルザって子も相当えげつねえな。」

シロの色がまだ決まっていって知った上でこの強引な提案。
ますます俺好みだ！」

つやさらの細トゲしい髪をなびかせて先頭に行くエルザ。
フレッドはその傍らでニヤリとほくそ笑むのであった。

続く。

3・「黄」vs無色

3・

中庭バトル、勃発！

展開は一方的だった。

エルザは弱い電気の魔法を放っては逃げ惑うシロを見てあざけり笑う。

現行バディ（この呼び名はそろそろ返上か！？）のフレッドもその様子を見てニヤニヤ。

おさらいしよう。

おおまかに魔法使いには四種類のタイプが存在し、「赤」「青」「黄」「緑」の四色で区別される。

エルザは黄色の魔法使いで、シロはまだ色を持っていない。

色を持っていない状態というのは簡単にいえば、相手を攻撃する魔法を使えない魔法使い。

エルザは黄色から連想される雷の魔法を撃つ事ができるが、シロには同等の武器が与えられていないのだ。

「シロが勝つには接近戦に持ち込むか、この戦いで魔法が使えるまでに成長するしかない。」

雷使いを相手に、どちらも無謀すぎる話だけだな」

とその時、シロが杖を構えて殴りに走る！

魔法使いのくせに杖で殴るって！？（笑）

しかしエルザの雷が直撃し、杖は遙か後方に吹き飛ばされる。

そしてシロも大きくよろめき尻餅をつく。

対峙するエルザも、勝敗を見届けるフレッドも、そしていつの間にか集まってきた野次馬の生徒たち十数名も皆が確信した。

黄色い子が勝つと。

しかし一人だけ諦めなかった。

土くれまみれになってもシロだけは諦めていなかった。

「僕はこんなところで負けられない。」

絶対に負けられない理由があるんだ！」

ふうとため息をつくエルザ。

「そろそろ疲れたわ。」

あんまり魔法使いすぎるとお肌にもよくないし、そろそろ本当に命中させちゃうからねー」

エルザの右手に輝く指輪からより一層まばゆい光が漏れ始める。

生身でこれを受けるのはあまりに危険。

しかし雷はその性質上、目にも止まらぬスピードで標的に向かって

飛んでいくため回避は不可能。
壁や盾での防御が必要となるがシロは何も持っていない。

「ガンバレー」

万策尽きたシロに抑揚のない声援を送ったのは、フレッドだった。
「諦めんなシロ」。

小説なんかだとこのくらいのタイミングで覚醒イベントがやってくるもんだ」

フレッド、ここでまさかのメタ発言。

周りの視線もお構いなしに応援を続ける。

「お前の名前を聞いたときにもしかしたらと思っていたよ。

お前はひょっとしたら四色のどの色にも当てはまらない究極のタイプ、白の魔法使いかもしれない！

シロだけに白、いいかげんに白。なーんてな」

「メツタなと言わないで下さい！」

もちろんフレッドのこの台詞はただの寒いギャグ、ダジャレの域の発言であつた。

しかし事態は、魔法使いたちの思惑を大きく外れて侵攻していく。
彼女の手元を離れた雷撃が、稲光とけたたましい轟音をあげて迫ってきた正にその時。

「今、弾いた？」

「消えた、…ていうか消したの？」

「まるで見えない穴に吸い込まれていったように見えた」
集まってきた野次馬が口々に驚きの声を上げる。

中庭は騒々しい物音と、異様な緊迫感に包まれている。

あの時エルザの放った強力な雷撃は、確かにシロめがけて疾走していた。

それが閃光とともに消滅した。

跡に残っていたのは仰向けに倒れこんでいるシロの姿だけだった。

そして勝負の行方。

予想以上に魔力を消費したためかエルザも地にひざを着き、必死に息を整えている。

彼女の妙にエロめかしいその姿に目を奪われながらもフレッドは今一度シロの方を向く。

「シロ、お前もしかして」

勝負は中止。

その後シロは保健室に運ばれ治療を受けた。
もつとも、特に異常も見つからずすぐに寮のベッドに移される運びとなった。

搬送中にフレッドは、エルザ達に隠していたことを正直に打ち明けた。

「ごめんな。」

元々バディの解消は両者の合意と教師の承認がないとできないんだ」

彼がこのバトルをけしかけた理由はいろいろある。

本当にバディを交換したかったという気持ちもあるし、ひよっとしたらシロの色が実戦を通して判明するかもしれないという淡い期待があった。

そして見事それが現実になった。

別れ際にエルザは言った。

「今回は引き分けということにしておきましょう。でも、次は絶対に負けないわ。起きたら彼に伝えておいてくださいね」

これはシロに対するメッセージ。

彼女はフレッドに向けての言葉も添えた。

「先輩のこと結構好みだよ。また会おうね」と。

シロがやってきて二日目の夜。

あれからずっとスースーと寝息を立てるシロを横目に、フレッドは一冊の文献に目を通していた。

ランプの明かりを頼りに指でなぞりながらその一項を何度も何度も

読みふける。

そしてある一つの馬鹿げた結論に辿り着くのであった。

「『闇に落ちた魔法使いの心は、悪魔に黒く塗りつぶされる』か。俺の見立てではシロは赤でも青でも、緑でも黄色でもない。ましてや白なんかでは絶対じゃない。

こいつ…」

ランプに照らされた寝顔は歳相応に幼く、あどけない。ショートの黒髪をなでながら、フレッドは今一度自分に言い聞かせるようにつぶやいた。

「こいつ、黒の魔法使いだ」

続く。

3・「黄」vs無色（後書き）

第一章、完了。

こんな感じで3話ずつ、八章か十章くらいまで書きたいと思いますので応援よろしくお願いします

予告。

「青」の魔法使いと対決するよ！

4・フレッシュウォーター

4・

ひし形を成すミシディア大陸は四つの勢力に分かれている。

長らく小競り合いを起こしている東のイリスア帝国と、西のウルスラ民国。

南の海沿いに細長く展開するエン共和国。

静観を決め込むのは北の極寒の地に構えるアレクサンドリア王国。

そして中立地帯、森や湖に囲まれた穏やかな土地オークロット領に魔法学園が存在する。

本日の午後の授業はバディ同士での魔法の練習。

組んだばかりの二人が手を取り合って行う実習。

「赤」の上級生フレッドは、パートナーのシロを演習場へと案内する。

その手には杖らしき長い棒状の物が、布に巻かれて握られている。

「フレッド先輩、昨日はすみませんでした。

僕もつと魔法上手くなりますから」

シロは、まるで恋人にすぎるかのような態度で懇願する。

彼は極度の女性恐怖症のため、数少ない男子生徒のフレッドに見放

されると困るのだ。

昨日の黄色の魔法使いとの対決では訳が分からないまま気絶してしまい、良いところなかった。

そう思い込んでいるシロに対してフレッドは思いも寄らない優しい言葉を投げかける。

「安心しろ」

フレッドに一瞬の間。

そして。

まるで何かを決意したかのように息を呑み、再度伝える。

「今しばらくはお前のバディでいてやるよ」

それを聞いた途端、シロの笑顔が晴れ渡った。

「ありがとうございます。」

ところで昨日はあの後どうなっちゃったんですか？

僕すっかり気絶しちゃってなにがなにやら」

鼻をつまらせながらフレッドの元に駆け寄る姿はさながら子犬のようだ。

「なんでもないよ。」

お前めがけて失踪していた電撃が、なぜか途中で疾走したっただけの話だ」

「だからその『なぜか』の部分が気になってるんじゃないですか。それに疾走と失踪の漢字が逆になってますよ」

シロの思いも寄らない発言に、フレッドの頭に疑問マークが浮か

ぶ。

その表情を見てシロの頭にも同様にクエスチョンマークが。

「？　なんで俺がしゃべった漢字が間違ってるとかわかるんだよ？
ていうか漢字とか言うなよ。

一応俺たちは英語とかで会話してるって設定だからそこ間違えんな
よな」

フレッドはそう言い残してスタスタと先に歩いて行ってしまった。
シロの頭にはフレッド以上の数の？マークが浮かび上がっていた。

賢明な読者の皆さんはもちろんわかりますよね？
それでは物語の続きにまいりましょうか。

演習場、上空。

多数の水球が浮かんでいるその光景に後ずさりするフレッド。
サイズは大小様々だが大きい水球はバスケットボール並の大きさがある。

それらが一斉に空から降り注ぐ。

そして後ろからは？マークを2個残したままシロが追いついて来ていて

「セーフだった」

「アウトです」

フレッドはとっさの機転で近くにあったもので水球を防ぐことができたが、シロは間に合わず濡れネズミに。

ローブの上から靴下までくまなく水が滴っている。

「ごめんなさい！ 大丈夫ですか」

慌てた様子の女の子が駆け寄ってきた。

水色の髪にみずみずしい肌。

瞳も濃い水色で、一見でも「青」の魔法使いであることがわかる。魔法使いが持つ四つの色は外見に反映されることも多いのだ。

「黄」色の魔法使いエルザが金髪であったように。

「全然大丈夫だよ。」

実はちょうどシャワーでも浴びたいと話してたところでね、こいつが」

フレッドは笑顔でシロを指差す。

フレッドのとっさの機転で『近くにあったもの』扱いされて水球の盾となったシロは、杖も教科書も手放して立ち尽くす。

「大丈夫じゃないですよ、もう。」

パンツまで水浸しです」

親指と人差し指でシャツを掴みパタパタさせるが、自然乾燥させるのは無理そうだ。

「お前トランクスいっぱい持つてるからいいじゃん」
「今は一枚も持ってませんよ！ 全部寮です」

涙目で訴えるシロ。

だが彼の目にはもう女の子しか映っていない。
フレッドはバディのことなどほったらかしで水色の髪の少女に話しかける。

「俺、2年のフレッド。

水を固めてコントロールするのって難しいんだよな。

俺が集中してリラックスできる呼吸法を教えてあげるよ」
布を巻いた杖をリズムよく動かしながら明るく振舞う。

その時！

遠くから何かが近づいてくる音！

擬音で表すと「ズドドドド！」がまさに適当。

巨大な物体が全速力で向かってくるような轟音。

あれは人だ！

青に近い髪の色が生徒が、髪をポニーテールのようにはためかせて走ってくる！

走りながらその人物は手に持った杖を振り上げ野球ボールほどの水球を高速で飛ばしてくる。

フレッドはひょいと身を翻し、再び彼の後輩が水害の犠牲となる！

青色の人物はひざに手をついて乱れた息を整える。

呆気にとられる少女に再び話題を振るフレッド。

泣き出すシロ。

「フレッドこの野郎！ 俺の妹には絶対に手出しはさせねえ！」

青い髪が生徒が叫ぶ！ 叫ぶッ！

彼はフレッドのよく知るクラスメートにして、この学園の数少ない男子生徒。

後ろで縛るほど髪は長いがれっきとした男である。

「なんだ、うざイダーか」

フレッドはやれやれといった感じでテキトーに対応する。

またかといった感じでも通用する。

フレッドの反応と、うざイダーのセリフのテンションの高さからこの二人の日常のやり取りが垣間見えるというものだ。

「うざイダーじゃねえ、サイダーだ！ いい加減名前覚えやがれ！」
「覚えてるし。わざと間違えて呼んでるだけだし」

シロ、とフレッドが指名するとぐずりながら寄ってくる。

ずぶ濡れのシロから少し距離をとり、フレッドは彼の紹介を始める。

「こいつは同じクラスのサイダー。」

まあ見ての通り青の魔法使いなんだが。

『青』のくせにやたらテンション高くてうざい。その上見た目どおりのバカで加えてこのキモさだ」

紹介の内容は散々なものだ。

シロはピッチリ張り付いてくる服が気持ち悪くてそれどころではなかったのだが。

とりあえず数少ない男子生徒で、フレッドと仲が悪い関係であることは把握できた。

しかしサイダーは黙っていなかった。

「あることないこと言うな！
うざいとキモイは撤回しろ！」

バカは撤回しなくていいの？

…と、シロが喋る前にフレッドが口を挟む。

「キモイだろうが。」

バディの子を妹とか呼びやがって。

これでその子に『お兄ちゃん』とか呼ばせてたら真性認定すつからな」

フレッド、責める。

サイダー、必死に反論！

「そういうプレイじゃねえから！

サラサは血のつながった妹だよ！」

少しの間。

そして男子三人の視線が一箇所に集中する。

先ほどの水色の髪少女はその視線にドギマギし、顔を赤らめながら返事する。

「はい。お恥ずかしながらサイダーの妹のサラサです」
「恥ずかしがるなよ！ とはサイダー談。」

お母さんに似たのかな、とシロは心の中でつぶやいた。
サイダー&サラサの両親には会ったこともないのだがなんとなくそんなことを考えていた。

故郷で暮らしている家族のことを思い出しながら。
もし自分にサラサのような妹がいたら、サイダーのような開放的な性格になれていたのだろうか…

「ぶっしゅーん！」

シロの回想を打ち消す、なにかが吹き出す音がした。
それは、シャカシャカと振った炭酸ジュースが勢いよく吹き出す時
の音によく似ていた。

続く。

5・赤い炎

5・

「ぶっしゅーん！」

サイダーがハジけた。

「青」の魔法使いサイダーがフレッドにキレた。
バディにして愛する妹のサラサに手を出す馬の骨に怒り心頭の様子。
青い波動が彼の周囲に発生し、この場にどんだん魔力が集まっ
ているのが肌で感じ取れる。

フレッドは指で後頭部をかきながら、真剣な眼差しでサイダーを
見据えている。

「やっべー、つい禁句言っちゃったよ」

「禁句ってなんです？」

フレッドは質問に答えない。

シロを無視することは彼にとって日常茶飯事であるが今回の少し
性質が違うようだ。

いつもは女の子に夢中になってそれ以外見えなくなるフレッドが、
今はサイダーに全神経を注いでいる。

「赤」のフレッドと「青」のサイダー。

まるで火と水のように相容れない最悪の相性。

それだけに片方が我を忘れて全力で向かって来たら、双方ただでは

済まないことを意味する。

「キレたぜフレッド、振った炭酸ジュースのごとく俺の心は爆発寸前だよ」

サイダーの台詞から初めて！マークが消えた。

表面上は穏やかな顔をしているが、その深遠は海の底のような無気味な静けさを湛えている。

「恥ずかしいセリフを堂々と言うな」

フレッドがまた余計なことを口走った。

静かな湖畔に立つと石を投げ入れずにはいられない彼の性分。きつとこういうやり取りも二人の日常なんだ。

「ウォーターレイン！」

サイダーが叫んだのは呪文！

彼が習得している魔法のひとつで、彼の足元から大量の水が噴き出してくる。

その水はサイダーの頭上で円形を維持しつつ溜まり続け、みるみるうちに車一台浸かるほどの大きな水球に膨れ上がる。

その呪文を聞くとフレッドが飛び退く。

「まずい。逃げるシロ」

「逃がさん！」

サイダーが集めた水球がグラリと傾く。
ある程度まで傾いた途端、堰を切ったように球の形を保てず割れて
飛び散る。
その無数の飛沫の一つ一つがまるで雨のようにフレッド達のいる地
上目掛けて落ちてくる。

激しい攻防。

もたついているシロを蹴飛ばしたフレッドは、手にした杖で飛沫を
さばく。

高速で降り注ぐ無数の水撃。

避けれるものはかわし、危ないものは叩き落とす。
魔法は使わない。いや、呪文を唱える暇さえない。

どれだけの時間を水と格闘し続けたのだろうか。
雨が通り過ぎた頃にはフレッドもサイダーも息を切らして立ってい
るのがやっとといった状態であった。

「どうだ！ 恐れ入ったかフレッドオ！」

力を振り絞って恫喝するサイダー。

全身傷だらけとなったフレッドは、それでも自分のテンションを崩
さず力いっぱいサイダーを罵倒する。

「何が『うおーたーれいん』だ。単語の意味が重複してるだろーが」
「言っつな！」

外野で眺めていたシロは遠くから口をはさむ。

「確かに。」

レイン「雨。雨が水なのは当たり前のこと。」

『うおーたーれいん』という呪文はちょっと文法的におかしいですよ」

「お前も少し黙れ！」

サイダー。シロに対しても顔を真っ赤にして激昂する。

などと茶化してはみたものの。

サイダーが唱えたウォーターレイン（水の雨）はかなりの大技だ。水の力だけで地面に多数のくぼみを作ってしまった。

一発でも命中していたら命の危機につながっていただろう。

フレッドに蹴飛ばされて倒れこんでいたシロのすぐ足元にも水撃は届いていた。

蹴る力を抑えていたら当たっていた。

それを見たフレッドは、杖に巻かれているボロボロになった布をシユルシユルとほどこいていく。

そして静かに言い放つ。

「見せてやるよシロ、俺の戦い方を」

布を取り去る。

そこに握られていたフレッドの獲物を見て、シロとサラサは目を丸

くした。

それは杖じゃなく、刀。

漆黒の鞘に収められた日本刀だった。

「そんな、なんで」

あまりのことに動揺を隠せないシロ。

サラサも両手で口を押え、目を見開いている。

そして驚く様子は見せないサイダーを見据えながら、フレッドはシロに語りかける。

「杖じゃなくてびつくりしたか？」

鞘を左手に持ち直す。

右手で柄を握り、臨戦態勢を維持しつつ彼は語り続ける。

「俺には生まれた時から魔力なんて備わってなかった。

けどどうしても魔法学園に通いたかった俺は苦労してこの刀を手に入れた。

マジックアイテム、銘を閻魔えんまのひと一振。

『赤』の魔法使いにおあつらえの炎を吐く剣だ」

マジックアイテムとは、魔力が秘められた道具のことである。

これを持つ事により魔力を持たない人間でも魔法を扱うことができるようになる。

蓄えられた魔力の量は物によってピンキリで、高い効果を持つアイテムは相応の高価で取引されている。

通常、高価なマジックアイテムを購入してまで魔法を習得しよう

とする男はごく少数。

しかしフレッドは大枚をはたいてでもそれを求めた。

それほどまでに欲しかったのだ。

自分だけの、魔法少女達のハーレムが欲しくて欲しくて堪らなかったのだ！

そして自分の夢を笑う者をフレッドは許さない。

その夢の道を阻む者は全て敵。

水色の髪的美少女を手に入れるための障害は、たとえその子の兄であろうと斬り伏せるまで。

いよいよフレッドが剣を抜く。

さあ、盛り上がってまいりました。

続く。

6・「赤」vs「青」

6・

フレッドが剣を抜く。

杖を振りかざして魔法を行使する生徒が集まるこの魔法学園において、彼は杖を持たない。

火を吐く特殊な刀を武器にする剣士タイプの魔法使い。

「魔法剣士、初めて見た」

「マジックフェンサー、初めて見た。でも」

一年生コンビ、シロとサラサが同時に驚きの声を上げる。

魔法はただ放出するだけのものではない。

魔力が少ないフレッドは自身が持つ剣に魔法の火を纏い、戦う。切っ先に灯った炎はたいまつのようにメラメラと力強く燃え盛る。

だが…

「ウォーターボール！」

サイダーの放った水の球がフレッドめがけて高速で飛んでくる。延長線上にシロが入るよう計算された一発。避ける事はできない。

炎の剣で打ち落とすとジュツという音と共に水球が弾け飛び、刀に留まりし炎もまた消えた。

その事態に、シロが気づいた時にはもう遅い。

「あっ！ 刀が」

火は水で消える。

「赤」と「青」が戦う場合、実力が拮抗していれば必ず赤が負ける。必ずだ。

魔法使いの色の相性はそれほどまでに大きい。

「俺の炎は消えねえよ」

シロの心配を他所にフレッドは涼しい顔。

よく見ると水を斬った彼の刀は水浸しになってしまったかと思いきや、再び赤い炎が灯り始めている。

その手にあるのは妖刀、閻魔えんまのひと一振。

ただの刀ではない様子。

続けざまにウォーターボール（水の球）が飛んでくる。

今度は二発！

しかし次は斬るまでもない。

フレッドがフンと気合を込めると火が大きく燃え盛り、炎の壁を作る。

飛び込んできた二つの水の塊はその高温の壁を越えることなく蒸発した。

「赤は青に必ず負ける？」

俺はそんな幻想信じてねえ。

青だろぅが白だろぅが、俺はむかつく相手には絶対に負けたくねえんだよ」

「赤」のフレッドは力強く言い放ち、再び刀に火をともし。

これに立ち向かうは「青」のサイダー。

お次は数十にもなるウォーターボールを作り出しながら吼える。

「負けたくないのはこっちも同じだ！

気に入らない奴には負けたくねえ！ 妹を泣かす奴は絶対に許さねえ！」

まさに一触即発。

「赤」のフレッドが守りたいのは夢とプライド。

「青」のサイダーが守りたいのは妹と、誇り。

水と油のようで似た者同士。

そんな二人の戦いの結末を、それぞれのバディとなったシロとサラサは離れて見守るだけ。

赤が刀を振りかぶり、同時に青が杖を振り下ろす。

大波のごとき炎の波がサイダーを包み込むが彼も負けじとウォーターボールを炎の壁めがけて投げつける。

一発命中するたびに火力が弱まっていくのが遠目からでもわかる。

火と水の攻防の果てにビー玉程度の小さな水球がフレッドに命中した。

ダメージはほとんどない。

そして燃え残った火種が一つ、風に流されサイダーの妹のスカートに包み込まれた。

わっと小さな声を上げて思わず飛びのくサラサ。

妹のささいなピンチを兄は見逃さなかった。

「てめえ！　サラサに当たったらどうすんだ！」

またしても怒号を飛ばすサイダー。

風で翻ったスカートを目で追いながら返したフレッドの言い分はこうだ。

「俺は女に危害は加えない。

だが、

俺の出した炎が原因で起きたアクシデントにまでは責任が持てん。具体例を挙げるとだな。

火の粉をひつかぶって服が全焼してしまったらそれはもう事故、自然の猛威ってことで納得してもらうしかないってことだ」

激しい魔法の応酬のあとでもフレッドはブレない。

乱れた息をさらに荒げながらその目はサラサだけを見つめていた。

「ちなみにヤケドの心配はないぞ。

温度は低くコントロールすることも可能だからな」

シロくんは、言葉が出なかった。

涙さえも出なかった。

ただただそこにあったのは、後悔と自責の念。

この先輩のことをつい今しがたまで思い慕っていたことへの後悔と、本当にこの先輩の下についてよかったのだろうかという自責の念。その二つの文字だけが確かにそこにあった。

この場の紅一点サラサさんは、固まっていた。

悲鳴さえも出なかった。

ただただそこにあったのは、恐怖と自分への憤り。

この人のことを本当に恐ろしくそれはもう怖ろしく思う恐怖と、この人のことをつい今しがたまでかつこいいと思ってしまうていた自分への憤り。

その二つの文字だけが確かにそこにあった。

サイダーさんは、キレました。

残りの五行文は省略します。

「ふざけんなあ！ もはや確信犯じゃねーか！」

親指を天に突き立てるフレッドに本日の最大声量をお見舞いする。そのあまりの音量にシロ、サラサの両名は意識を取り戻す。

嗚呼、神よ。

この場に彼に反論できる人間がいることを幸運と呼ばずしてなんと呼ぶ。

この者がいなければ彼は欲望のままにいたいけな女子生徒に襲い掛かっていたに違いない。

暴走モードに突入寸前のフレッドを止められるのはもうこの人物しかいない。

男サイダー、

最愛の妹を悪魔の毒手から救うための戦いの第二ラウンド開幕だ。

「改めて理解した！

お前のような変態を野放しにしていたらこの学園の秩序に関わるってことを！

安心しろよサラサ！

お前の服が燃え出したときはお兄ちゃんがすぐに水をぶっかけて鎮火してやるからな！

それで服が透けたり！

張り付いて体のラインがくつきり出ちゃうようなことになっても！それは事故！ 人命救助ってことで納得してくれよなっ！」

「どつちも変態だー！」

第四話での一件からこっち、服がびしょぬれたままのシロが盛大に大声を出す。

しかしもつと大変な事態になっているのが彼女だった。

純白の杖を構えて無我夢中で呪文を唱えている。

いろんな感情が交じり合ってぐちゃぐちゃになって、もつなにもか

もが限界であふれ出そうな状況だ。

妹のただならぬ様子にいち早く気づいた兄のサイダーは後に語る。

「あの時は体中の血が引いていく音が聞こえました」と。

その時、サラサの足元から膨大な量の水が噴き出す。

先ほどの「うーたーれいん」の比ではない。車が何十台浸かれば埋まるのだろうかという圧倒的水量。

それが二人の立つ窪地に向けて上空からなだれ込む様は圧巻！まさに自然の猛威である。

彼女の後ろで立ち尽くしていたシロは、奔流に飲み込まれるバデイの最後の声を聞いた。

「あ、これマジイ……」

その日の未明。

魔法学園の数少ない男子生徒二名が、演習場に突如出来た湖の底から発見されたという。

続く。

6・「赤」vs「青」（後書き）

第二章、完。

補完としてサイダーはマクスの早乙アルの髪短いver.
サラサはまかの樹やかあたりの外見でイメージしてください。

次回予告。

中ボス戦がはじまります！

7 ピクニックに行こう

7 .

「素晴らしい輝きだ」

月光に照らされた部屋に一つの人影あり。

掌に収まるその輝きを見つめる眼差しは、それとは対照的に薄黒く濁っている。

その煌めきを見失わないよう両手で優しく包み込み服の中へしまう。辺りが闇に飲まれる頃、その人物の姿も静かに消えていた。

「というわけで、盗まれた秘宝を探してもらいたい」

魔法学園の教師アカヒゲに呼ばれた二名の生徒。

一人は二年生で、魔法使いでありながら異国の刀を使って戦う「赤」の剣士フレッド。

彼の後ろについて入ってきたもう一人は一年生。

しかし入学からひと月が経過しようというこの時期になって未だ魔法使いの「色」が判明していないシロ。

魔法使いの色は戦うための属性にあらず。

その色は外見だけでなく、性格や物の考え方などの内面にも深く影

響を及ぼす。

「なんで俺がそんなことしなくちゃいけないんだよ。」

しかもこんな、魔法も使えない奴と二人旅だなんて危なすぎる」

燃え盛る炎のように遠慮がないフレッドは下級生や教師にも分け隔てなく物申す生徒。

「だまりなさい」

これに同じ「赤」の教師アカヒゲが威圧感を持つてたしなめる。

名前や色のとおりこの男もまた心に熱い情熱を灯して教職に就いている。

口元には渋いヒゲも生え揃っているが、
だが黒毛だ。

そのヒゲを指先でもてあそびながら教師は言う。

「これは君たちへの救済策でもあるのですよ」

これまでの問題点をおさらいしてみよう。

一、入学二日目からバディの後輩と一年生を学園の敷地内で戦わせる。

一、その翌日には別の一年生を刺激し、演習場の土地をダムに変えた。

さらにこれまで職員室に「赤の二年生がひどい」と女子生徒達から多数の苦情が寄せられている。

ここだけの話、

シロが来る前から彼は何かと揉め事を起こす学園の問題児であっ

た。

二年生に進級させても改善の兆しが見られないフレッドに、ついに学園側も重い腰を上げたということだろう。

それでも学園は、生徒に無理難題を押し付けたりはしない。

黒いヒゲを上下に動かしながらアカヒゲ先生が付け加える。

「もちろん君達二人だけに行かせたりはしない。

レイ君入りなさい」

ヒゲの合図を聞くや一人の生徒が奥から姿を現した。

「わっ！」

その人物の姿を見た途端フレッドがのけぞる。

シロモリアクションこそは薄いものの目を見開いて固まってしまっ

「す、凄い髪型」

教師アカヒゲに招かれて入室した女子生徒。

彼女の黄土色の髪の毛がまるでツタのように自身の体に巻きついて
いる。

両腕はフリーだが服の上から体の周りを二回り。

全部まっすぐに伸ばしたら軽く地面に届いてしまっだろう。

「三年のレイよ。色は『黄』色の土系統」

大人びた声に落ち着いた物腰。

少し失礼な言い方ではあるが、どっしりとした印象を与える女性だ。

「あ、ああ土か。それは助かったな」

黄色の土と聞いた途端フレッドは安堵の表情を浮かべる。

互いに作用しあう魔法使いの四つの属性。

四色の上下関係において、黄色は「青」に強く「緑」に弱い。

フレッドが持つ「赤」とは対等に位置する付き合いやすい相性なのだ。

ちよつとちよつととシロが呼ぶ。

一ヶ月たつても彼の女性に対する付き合い方は変わらない。

初対面の女性と話すときなどは原則的にフレッドが間に入らないと会話にならないのだ。

そんなシロがいつも以上に肩をすくめて尋ねてくる。

「黄色つて確か、入学当初に知り合ったエルザさんと同じ色ですよ
ね」

黄色の魔法使いエルザ。

シロと同じ一年生でありながら強力な雷の魔法をバンバン扱う美少女である。

詳しいことは第一章に記されているため説明は省くが、

結果的にシロは彼女にコテンパンに痛めつけられた経緯がある。

それ以来電気や「黄」色の人間に対して異常におびえるようになってしまっているのだ。

「一口に黄色と言っても色々系統があるのよ。

赤は火、青は水といった具合に分かりやすいのに対し、

黄色はさらにそこから雷と土の二種類があるの。

厳密には雷と土の両方ともを扱える三種類に分けられるんだけどね」

フレッドの影に隠れるシロに優しい口調で語りかける三年生レイ。彼女はさらにそこから今回のミッションについての説明を始める。

「今回盗まれたのは学園の秘宝『コスモプラネット』。

惑星を模した形の貴重な宝石であり、それ自体が強大な魔力を蓄えたマジックアイテムなのよ。

古くは学園の創設者エルが女王から寄贈されたものを代々守り続けてきたんだけどね。

物が物だけにこれまでの歴史上たくさんの盗賊や魔法使い達に狙われ続けてきたとされているわ。

五重のヘキサロックをかけた秘密の部屋に安置されていたのだけけど、いったいどうやったのか一晩のうちに奪い去られていたらしいわ。

そしてその部屋には犯人が残したと思われる書き置きがあったの。

西の森の奥に学園が昔使っていた宿舎があり、コスモプラネットにかけられたロックを解除できる人間をそこに連れて来いという要求よ。

必要な手順を記したメモと鍵は用意してもらったわ。

あとは私たちが先に出発したチームと合流して実行犯達を捕まえる。もちろん危険な任務だから戦闘になったら私と先発隊の面々が相手をする。あなたたち下級生には周囲の見張り仕事をしてもらっわ」

熱心に状況を説明するレイ。教師アカヒゲが口を挟むまでもない。フレッドとシロはふんふんと頷きながら彼女の話に耳を貸している。

…ぶっちゃけ。

二人とも彼女の髪型のインパクトが強烈過ぎてそれどころではなかった。

「着替えるの大変そうだ」

「脱がすの大変そうだな」

などと、

それぞれ自分勝手なことを想像させてしまうほどの破壊力が彼女の巻き付き髪には内包されていた。

とにかくやることは決まった。

秘室の名前は長くて書きにくいからコスプラとでも略そう。

フレッドとシロがやるべきことはこのレイという女生徒に付いて行き、盗人を捕える手伝いをする事。

「なににせよ三年生が一緒なのは心強いな。」

レイさん。道中は俺達が貴女の盾になるから大船に乗った気でいて

くれよ」

フレッドの威勢のいい言葉に笑顔で答えるレイ。

不安げな表情を浮かべるシロを引っ張って退室しようとするフレッドを教師アカヒゲが止める。

「待ちなさい。」

君たちと同期のバディがもう一組同行するから、まずはこの部屋で打ち合わせだ」

「もう一組？」

その言葉を聞いてシロの表情が若干ではあるが晴れる。

それ以上に喜びを隠せない様子なのがフレッドであった。

「おうおう、数が増えるのは良いことだ。」

魔法使いは群れば群れるほど強くなるから頼もしいな」

そう言ってますます上機嫌になって舞い上がる。

「また女の子が増えるわけだしな！」

内なるフレッドの顔がそう叫んでいた。

女好きの彼にとってはしょうがない。

圧倒的女子在籍率を誇る魔法学園において、自分たちのようなイレギュラーを除けば通常は女子が二人増える計算になるのだから。

そう、通常は

そのバディはほどなくやってきた。

彼女らはまるで扉の前で話を聞いていたかのようにタイミングよく入ってきた。

そしてバディの片割れは集まったメンツを見回すと、声を大にして言い放つ。

「可愛い女の子だと思ったか？ 俺だよ！」

見覚えのあるシルエツト。

聞き慣れたその声を聞くや否や、二人の頭上にもくもくと雨雲が立ち込めてきたのであった。

続く。

7 ピクニックに行こう（後書き）

> i 2 8 8 0 6 — 3 7 2 1 <

新キャラ、レイの髪型をより分かりやすくするためイラストを描きました。

これからも主要キャラのデフォ絵とか描いていこうと思います。

もちろん「描いてあげます」って人がいたら是非よろしくお願いしますのです。

8・最悪の展開

8・

> i29009 — 3721 <サイダー&サラサ兄妹。

「可愛い女の子だと思ったか？ 俺だよ！」
「失礼しまーす」

勢いよく扉を開けて入ってきた二人組は、とても見覚えのあるお揃いの寒色系の髪の色をしていた。
どちらも「青」の魔法使い。

バディであり血のつながった兄妹で、かつてフレッドとシロを苦しめた二人組。

「おう、サラサちゃんが一緒に来るのか」

フレッドの頬に一筋の雫が滴り落ちる。
後ろのシロも釣られるように顔がこわばる。
しかし彼女だけはますます明るく振る舞うのであった。

「はい。
出来る限りサポートさせていただきますんで、よろしく願いします」

女の子にここまで言われて引き下がるのは男じゃない。

そう言いたげな顔をして、親指を立てて返事をするのがフレッドという男だ。

「任せとけ。

サラサちゃんが危ない目に遭わないよう全力で前衛を務めさせてもらうぜ」

ここで二章のおさらいだ。

「青」の魔法使い、サラサ。

透き通る水色ショートカットの美少女で、その性格は小川のせせらぎのように清らかで穏やか。

しかしひとたび嵐が吹けばその色はまたたく間に濁流へと変わる。事実、魔法の力で演習場に広大な湖を作った先月の一件の張本人である。

一年生でありながら火事場の馬鹿力とはいえあの水量。

色による相性だけでなく、やはり魔法は基本的に女性のもの。

男が訓練や道具で身につけた程度の魔力など、女が潜在的に有する魔力に比べればただ水流に翻弄されるがままの小石のように微々たるものである。

「ってあれ？ お前いつの間に仲良くなったの？
ていうか女と喋れない設定を無視するなよ」

そんな彼女となにやら良い感じに会話が弾んでいる相棒の姿をこの男が見逃すはずがなかった。

このシロという少年は女性が大の苦手で目を合わせることもさえはばかられるほどの人見知りだ。

その男がこの水色の美少女と、ややぎこちなくではあるが男というクッションを挟まずに会話を繰り広げている。

この事実が一番びっくりしているのが当の本人でなくなぜかフレッドであった。

「設定とか言わないでください。

全くしゃべれないわけじゃないですし、授業で分らないところとか教えあってるんですよ」

おずおずと言葉を返してくるシロ。

目をつけていた女生徒と生意気にも仲良く談笑するその光景が彼にとっては不愉快であった。

すぐにでも頭を小突きたいところではあるがこの場の女子生徒達の目に免じ、その拳をゆっくりといさめながらも疑問を彼女に投げかける。

「そんなの俺に聞けばいいじゃん」

「フレッド先輩は怖いからイヤだし、兄に聞くのもイヤなんです」

サラサの返答はばつさりだった。

やはり演習場での一件の傷跡は大きい。

もちろん湖の底に沈められた男二人のトラウマも計り知れないもの

があるだろうが、彼女もまた被害者なのだ。
心に受けた衝撃はそう簡単には消えない。

だって、女の子だもん。

「だからってそんな、」

情けなくもサラサにすぎるフレッド。
態度を一変させ、ずぶ濡れの子犬のような瞳を演じてみても彼女の
反応は変わらない。

「とにかくその二人はもう私にとって論外だったんです。
消去法でシロくんが残ったの。ねー」

首をかしげた可愛らしい仕草で同意を求めるサラサだが、条件反
射でビクつくシロ。
どうもまだ完全に打ち解けてはいないようだ。

「そろそろ行きましょう」
会話の途切れ目に三年生レイが口を挟む。

「よし、じゃあ出発だ」

こうして俺達の冒険は始まった。

目指すは西の森のうち捨てられた旧校舎。

おそらく過酷な旅になるだろう。

盗賊や獰猛な野生動物とも遭遇するかもしれない。

俺達の足代わりとなる馬達だって守って進まなくちゃいけない。

でも心配するなよサラサちゃん、レイ姉さん。それと腰巾着。

危ないことはなにもない。

なぜならこの学園が誇る「赤」の最強剣士フレッドさまが同行しているのだから。

近づく不埒な輩はこの刀一本でばったばったとなぎ倒してくれるわ。

それでも怖くなったり、寂しいと感ずることがあればその時は遠慮することはない。

だまって俺の胸の中で泣きな。

大丈夫。

この四人パーティの中に、俺達の親密なひと時を邪魔する奴なんていないんだから

「俺を無視すんな！」

背後から、おなじみのビクリマークを付けて奴が声を荒げる。

そう奴こそが先月フレッドと対決した「青」の魔法使い。

サラサのバディであり、同時に血のつながった兄貴でもあるサイダ
ー君。

冒頭以来ひさしぶりのセリフであった！

そんなこんなで廃宿舍まで辿り着いたのだった！

「着くの早くね？」

「いいんだよ」

何がいいんだよと訝しげな表情を浮かべるサイダーはひとまず置き。

大して敵と遭遇することなく目的地まで辿り着いたフレッド、シロ、サイダー、サラサ、そしてレイ一行。

たった四行のスペースの間も彼らは馬車に長時間揺られ続けた。ひさしぶりに地に足をつけ、誰の合図があったわけでもなくみんな思い思いにストレッチを始める。

それにしても妙だ。

「人の気配が無いな」

辺りを見渡しながらフレッドがつぶやく。

「人の気配とかわかんのかよ！」

サイダー、つつこむ。

とはいえただっ広い森の中、すでに到着しているはずの先発隊の姿が見えないのは確かだ。

「私は辺りを見えます。

君達は宿舎の中で待機していなさい」

そう言っただパーティのリーダー、レイが静かに歩き出す。

一人で大丈夫だろうかと不安な気持ちはあったが彼女は優秀な魔法使いなので問題はないだろう。

それよりもここまでの移動で疲れが溜まっている。

ここは素直にリーダーの指示を仰ぐことにした。

「あー、長旅で疲れたなー」

積み上げられた石畳にどかっと腰を下ろしてフレッドが言う。

「ずっと座ってたただけだろが！」

サイダー、再びつつこむ。

彼は移動中の馬車の中でもこうやってフレッドに釘を刺し続けた。

でないとドンドン馬車の中が、フレッドの悶々とした熱気に飲まれてしまうからだ。

「俺みたいな高貴な人間は馬車の揺れとかが堪えるんだよ。

ほら、今もまだ揺れてる感覚が残ってるよ」

「たしかにそうですねー」

よいしょと腰を下ろしながらシロも相槌を打ち、場に穏やかな空気が流れようとしていた。

「ちょっと待って。これ、本当に揺れてない？」

気になる言葉を発したのはサラサ。

「青」の魔法使いは周囲の環境の変化に人一倍敏感である。

かすかな振動でも波紋が起る水の特性を持つタイプだからだろう。

同じ「青」であるサイダーの意見は真逆だった。

「俺は何も感じないが！」

「そんだけテンション上げてたらそうだろうよ」

今日はじめてツツコミが逆になったフレッド。

「ウルサイダーもこう言ってることだし何もないって。きっと疲れが出たんだよ。」

ひざ貸してやるからゆっくり休みな」

ぼんぽんと叩いてひざを差し出すフレッドの好意を、サラサは丁重に拒絶する。

その時、大地が勢いよくせり上がる。

鳴り響く轟音。

轟く振動。

木の枝で休んでいた数十羽の野鳥達は激しい喧騒と共に飛び立った。しかし地面の上にいる四人はあまりの振れに立つことさえ出来ない。転ぶまい、

離されまいと必死になって大地にしがみつくことしかできない。

振動が収まったかどうかという時。

巻き起こった土煙の向こう側から放たれる鋭い眼光を四人は感じた。ドスン、という重い振動。

もう一度、ドスン。

徐々に徐々にその音が近づくにつれて、より強く視線が肌で感じ取れるのが理解できる。

その巨大な歩く物体は、先ほどの衝撃で傾いた木々を持ち上げて現れた。

体長七、八メートルはあるだろうか。

ゴツゴツの肌。

いびつな体型。

全身土の色をした一つ目の怪物。

あまりの迫力と威圧感から一年生コンビ、シロとサラサは震えて立ち上がれなくなっていた。

その場から逃げることさえ考えられず、ただ視線だけが外れずこのデカ物を見つめていた。

「ゴーレムだと？ どうなってるんだよ」

真っ先に立ち上がり、剣を構えたのが「赤」のフレッドだった。負けじとほぼ同時に杖を構えたのが同じ二年生で「青」のサイダー！

「こんなでかいの相手にしてらんねえぞ！

土のゴーレムってことは召喚した魔法使いは『黄』色だ。相性が悪すぎる！」

四色に分けられる魔法使いの色は、互いに相生相克の関係にある。

「青」は赤に勝ち、「赤」は緑に勝つ。

黄色に勝ち得る色は「緑」。

だが。

この場に緑の魔法使いはいない。

唯一同じ色で対抗し得る三年生のレイはまだ戻ってこない。

「だからって素直に逃がしちゃくれねえし、なんとかするしかない
だろ。」

それに俺の辞書に逃げるなんて文字はねえ」

勢いよく妖刀の鞘を投げ捨て、文字通り闘志を燃やすフレッド。
一ヶ月前のサイダーとの戦いで見せたのと同じ炎の剣だ。

フレッドの炎はただ燃やしたり、壁を作って防御に当てるだけ
はない。

刀に力を込め、フン！ と一振りすると複数の炎の矢が飛ぶ。
それらはまっすぐゴーレムの巨大な胴体に着弾したが、マツチ棒に
等しい火ではこの化け物の進撃を食い止めるまでには至らなかった。

「やめろ！ お前の火力じゃこの土は燃やせねえ！」

少し離れた位置からサイダーが静止をかける。

杖を下ろしたその両腕は、恐怖で動けない妹の両肩をがっちりと掴
んでいる。

二人までの距離を確認すると少し安心したようにフレッドが命令す

る。

「サラサちゃんをつれて離れてるクサイダー」

キラいな奴にこんなことを言われて、黙っているサイダーではない。

「生意気なこと言うな！ あと誰が臭いだ！
とにかく少しでも逃げ回ってレイさんと合流するんだ！」

彼の説得に耳を傾けつつも、今度は自分の相棒のシロとの距離を確認し、再度ゴーレムと向き合うフレッド。

その瞳に恐れや迷いが全く無いわけではなかったが、少なくとも勝つ気だけは満々に満ち溢れていた。

「見くびるなよ。

まだ手はある。

ここにいる全員が協力すれば、この怪物を倒すことができる」

作戦を打ち立てている間にも、ゴーレムは一步步確実に迫ってきている。

ドスン、

ドスンと。

続く。

9・ソルトウォーター

9・

「ウォーターシュート！」

開幕早々にサイダーの水魔法が炸裂する。

妹をかばいながらの片手攻撃だが威力は十分だ。

大量の水を圧縮して固めた一撃がゴーレムの胴体に見事命中する。

体を構成する土が水分を含んで重くなる。

色が濃くなって、動きが鈍くなったのが確認できる。

その上からかぶさってくるのがフレッドの撃った火炎弾だ。

次々と着弾し、ゴーレムの体から水気を奪っていく。

「火だけでは燃やせない。水だけでも固まらない。だったら火と水を交互に浴びせ続ける。固めて燃やしてを繰り返し返せばどうなるか、それをこれから見せてやる」

フレッド達の置かれている状況はこうだ。

一番立ち回りの素早い「赤」の彼が刀を振り回してゴーレムをかく乱し、燃やす役。

サイダーとサラサの「青」の魔法使いバディは離れた位置から水を放ちゴーレムの動きを制限する。

この「赤」と「青」の即興の遠近コンビネーション。

そして無色のシロが互いの色のサポートに回るこの陣形は期待以上の効果を上げた。

するとゴーレムの動きに変化が現れた。

水を吸っては乾き、また吸っては乾きを繰り返したゴーレムの体がぼろぼろと崩れだしたのだ。

「いけるぞ、ラスト一発だ」

フレッドから合図が送られ、サイダーが渾身の一撃をお見舞いする。

「ウォーターレイン！」

かつてフレッドを苦しめた大技がゴーレムに大ダメージを与える。水分を含んで固まっただけでなく、魔法の衝撃で無数の穴があく。炎に焼かれた後の弱った土でなければこうはいかなかっただろう。

そこへ勇猛果敢に駆け寄る剣士の姿が。

炎を噴き上げる刀を構え、ゴーレムの体を勢いよく駆け上がる。足から胴体、胴体から頭。

そして頭から空へ。

上空から炎の落襲。

全身を業火に包まれた土の怪物は真っ黒焦げになり、うめき声のよ
うな音を出してうずくまる。

「やったか!？」

猛烈な熱気を浴びながら、サイダーが思わず声を漏らす。

ちょうどその時、灼熱の上昇気流の中を突き抜けてフレッドが空か
ら無事着地した。

そして威勢よくつつこむ。

「やったかと言っな」

崩れ落ちるゴーレム。

土で出来た体に次々亀裂が入りボロボロと手足がもげ落ちる。
あやうくもフラグを立ててしまったサイダーだが、やがて黒い燃え
カスを残してゴーレムは土に還った。

「おどかすんじゃない！ちゃんとやったじゃないか！」

以上。

四対一とはいえフレッド達の完全勝利である。

「やったな！ みんなで力を合わせた結果だ！」

サイダーはサラサの元へ。サラサはシロへ。

みんな思い思いの相手の所へ駆け寄り、円形を成して互いの働きを褒め称える。

祝勝のひと時。
しかし。

拾い上げた鞘に刀を納め、仲間の下に歩み寄るフレッドの脳裏に一つの疑問が浮かんでいた。

五分か、十分か。

かなり激しく魔法戦を展開していたはずなのに。

待ち合わせを要求してきた盗賊はおるか、先に到着しているはずの味方の魔法使い達が一向に現れないのはどういうことだ。

「それにしてもだ！

事前にレイさんに教え込まれたフォーメーションが活きたな！」

「レイさんのおかげで勝てたようなもんだね」

上機嫌で勝ち鬨を上げているのは「青」の魔法使い兄妹であった。馬車の中でリーダーが教えてくれていた、強い敵に遭遇した時の陣形が早速役立つた。

あの打ち合わせの時間がなければフレッドもここまで上手く立ち回することはできなかっただろう。

「それにしても遅いねレイさん。どこまで行っただろ」

「あの人は、もしかしたら来ないかもな」

フレッドのつぶやきに場の空気が静まる。

いつもなら真っ先に女の子の元へ駆け寄って、スキンシップと称して肩もみを始めてもおかしくないこの男が神妙な顔をして立ちつくしている。

その意味をいち早く察したサイダーが思い出したように叫ぶ。

「別のゴーレムに襲われたってことか！

だとしたら早く助けに行ったほうがいいな！」

「そうじゃねえ」

サイダーをテンションごと押さえ込む静かな威圧感。

その空気を肌で感じた一年生達からも急激に勝利の熱が引いていく。すこし間をあけて場が静まりだしたのを待ち、彼は自分が抱いた疑問を提示する。

「ゴーレムは土の魔物だろ？」

遠くで操っていた術者は『黄』色の魔法使いで間違いない。

そしてレイさんも黄色で、あの人がいなくなった途端やつが襲ってきた。

これって偶然か？」

土を操る味方のレイがいなくなったと同時に土の魔物が襲ってきた現実。

同じ黄色の魔法使いの仕業であるかもしれないという奇妙な共通点がもたらすもの。

それは、味方であるはずの彼女が隠れてフレッド達を襲撃したのかもしれないことを意味する。

人目につかないこの森まで連れてきて、人知れず始末するために。

「おい！ 滅多なこと言うもんじゃねえ！」

サイダーが今までにない剣幕でフレッドをたしなめる。

たしなめるというより、怒鳴りつけるという表現の方がふさわしいかもしれない。

レイが裏切ったかもしれないという疑惑。

その意味を噛みしめ、その味がどんなものかを知っているかのように渋い顔をしている。

「悪い。」

どうも髪の長い女性を見ると疑いの目を向けちまう」

この場の淀んだ空気を換気するためあっさり折れるフレッド。

誰とも目を合わせず、罰の悪そうに頬を指先でかきながらつぶやいた。

「そっか、こっちこそすまねえ」

そしてらしくもなくしゅんと謝るサイダー。
この時ばかりはいつものエクスクラメーションマーク！
これが消えていた。

ゴーレムの崩壊で巻き上がっていた土煙がようやく収まった頃。
ある男の曇った表情にいち早く気づいた彼女が心配そうに尋ねる。

「どうしたのシロ君？」

サラサの視線の先にいる少年シロ。
力なく杖を握り、うつむいて立ち尽くす彼を気に掛ける彼女の一言
で他の二人もシロに目を配る。

「あ、さては一人だけ活躍できなくて拗ねてやがったな」

ここで相棒フレッドが茶化す。
自分がもらした一言で場の空気を汚してしまったせめてものフォロ
ーだったのだろうか。

しかしこの発言は彼をますます落ち込ませる結果となった。
シロは大きなため息をもらし、その場にしゃがみこんでしまった。

「しかたがないよ。シロ君はまだ色が決まっていなかったから」

慌ててサラサが頭を撫でる。

よほど堪えたのか、女の子に触れられてるにも関わらずシロは動じ

るどころの様子ではない。
それをヨシとしたのか。

仲の良い弟をなだめるようなお姉さんぶった口調で励ます。

「フレッド！ ちょっとは言い方を考えたらどうだ！」

そしてサイダーはいつもの調子を取り戻す。

先ほどまでの真剣な雰囲気ではなく、普段のハイテンションなサイダーだ。

「ごめんなさいフレッド先輩。

やっぱり僕なんていないほうが」

ヨシヨシと頭を撫でられながらの涙声でシロが言った。

小さな体をさらにちぢこませて怯えるように震えている後輩の姿。その両脇では二人の「青」の魔法使いが鬼の形相で立ちはだかる。

「あー、それはなー」

予想外に精神的ダメージを負っていたシロに面喰らい、さすがに罪悪感が芽生えたのか。

周りの視線に耐えられなかった様子で気まずそうにしているフレッド。

彼は知っている。

かつて美少女エルザと戦った時に見せたあの未知の現象がシロの魔法によるものであることを。

そして現実味を帯びた仮説を立てている。

それはシロが、四つの色のどれにも当てはまらないタイプの魔法使いであるということだ。

その仮説を本人にも、学園の教師にも話さずにいた。
もう二度と同じ悲劇を繰り返さないために。

その時だった。

ドスンという鈍い衝撃。

背中に伝わる強烈な痛みを受けてフレッドが前のめりに倒れる。

他の三人には一体なにが起きたのか視認できなかったが、その答えは彼の背後に隠れていた。

先ほどのゴーレムが頭と右腕部のみ再生している。

そして相変わらずの不気味な目線で照準を付け、後ろからフレッドを襲ったのだ。

腕を構成している土を飛ばしたのか、フレッドの背中には鋭く尖った土の塊が突き刺さっていた。

シャツに染み出す鮮やかな赤色模様。

背中から横腹を伝いポタポタと地にしたたる己の血液を見て、絞り出した声でフレッドがつぶやく。

「逃げるシロ、サラサちゃん」

駆け寄ってくる二人を突き放すように言い放ち、再び刀を抜くフレッド。

この場において唯一名前を呼ばなかったサイダーも杖を構えながらやってくる。

「やけにあっさり倒せたと思ったらゴーレムめ！
最初から本気なんて出しちゃいなかったんだ！」

疲労困憊の連戦でも二人はまだ諦めず戦おうとしている。
なぜなら二人とも大の負けず嫌いだから。

しかし今はそれ以上に、自分達の後姿を見つめている後輩を守るために戦っている。

彼らに情けない格好は見せられないから。

その気持ちを踏みにじるかのように立ちはだかる土の怪物。
大地に埋もれていた左腕部を岩盤ごと持ち上げ、魔法使い目掛けて投げつける。

ガラガラと音を立てて落ちてくる大地が轟音と土煙を巻き上げて迫る。

魔力を消耗しきった今のフレッド達では太刀打ちできない圧倒的規模が全てを飲み込んでいく。

「シロ！」

地鳴りの最中、彼の名を呼んだ。
姿は見えないがその名を呼んだ。

ガス欠の火を吹きながら今にも消えそうな妖刀のともし火を見つめながら彼に向けて言葉を残す。

「もしこの瓦礫に飲まれても生きていられたら、お前だけでも逃げる。」

絶対にだ」

応えは返ってこない。

だがフレッドは続けて言った。

最後の力を振り絞って闘志を燃やし、刀を振り上げながら叫んだ。

「こいつには絶対に勝てないからだ！」

そして舞台は闇に包まれた。

続く。

9 ソルトウォーター（後書き）

この章は4部立てでお送りします。

10・黒い影

10・

「フレッド先輩！」

木々の隙間から差す日の光。

それを遮るように人の影が動く。

何度も何度も名前を呼ばれて少しずつ意識が戻ってきた。

土の上で仰向けに倒れていたフレッドのそばにシロがいた。

服やローブがボロボロになっていて、全身埃まみれの汚らしい格好をしている。

しかしそれはお互い様であることにすぐに気付く。

近くには見慣れた「青」の魔法使い達もいた。

その手には命と美少女の次くらいに大切にしている妖刀が握られていた。

ひとまず全員が無事に生きていた。

目覚めて早々、まずは一安心のフレッド。

だがサイダーのそばで同じく倒れこんでいる彼女を見るや否や飛び起きて傍へ駆け寄る。

「サラサちゃん、どうしたんだ」

「魔力を消耗しきって休んでるだけだ！ 静かにしろ！」

現在の状況。

倒したはずのゴーレムが復活し、さらに強力なパワーで攻撃してきた。

シロを逃がすために死を覚悟して立ち向かったフレッドであったがその力は遠く及ばなかった。

土壇場でチームの危機を救ったのがサラサ。

魔力を振り絞ってゴーレムの動きを止めることに成功。

気絶したフレッドを担いで辛くも森の中を逃げ回っている状態だ。

ゴーレムの足音がいまだ大地を揺るがしている。

乗ってきた馬車はどうなったか分からない。

三年生のレイは現れず。

彼女が黒幕であるかどうかに関わらず、いまだ合流することができずにいる。

気になることは山ほどある。

フレッドはまず、今一番気にかけている者の元へ歩み寄り、語りかけた。

「どうして逃げなかった」

「助けてくれてありがとう」

真っ先に頭に浮かんだのは後者。

しかしフレッドが発した言葉は前者だった。

先輩として格好つけた手前、そう言っしかなかった。

「フレッド先輩こそ、どうして僕なんかをかばって」

すっかり弱気モードになっているシロ。

それを見てついつい強気な態度に出るフレッド。

「勘違いすんな。

お前を盾にしようとしたらしくじつただけだ」

一ヶ月前のことを思い出していた。

わかりやすく言うと第二章での出来事だ。

サラサにちよつかいを出したらその子の兄が遠くから水弾を放ってきて、それを防ぐためにシロが盾にされた。

そのすぐ前にも彼女の水魔法が失敗して、シロを身代わりに自分の身だけは守ったことがあったな、と。

「盾。

誰かの役に立てるのならいつそ盾になれた方が幸せだった」

その言葉を聞いてフレッドが怪訝そうな顔をする。

だがそんなことはお構いなしにシロは語る。

フレッドに向けた背中と声は震えていた。

「なんで僕はこんなに弱いんだ。

こんな状況になっても守ってもらうことしかできないなんて。

女の子のサラサちゃんだってあんなになるまで戦っていたのに」

サラサの意識はまだ戻らない。

リーダーを見失ったパーティは全員傷だらけ。

片手で涙を拭き、もう片方の手で鼻水を拭う後輩の姿。

ゴーレムの足音が鳴り響く森の中。

痺れを切らしたようにフレッドが動く。

背を向けるシロの正面に回り込み、かがんで目線を合わせて話しかける。

「泣くんじゃねえ。男だろ」

いつも以上にかわいらしく映るシロの顔。

小柄で華奢な体に、両手で泣き顔を隠す女の子っぽい仕草。

泣き止まない彼を見てチツと仕方なさそうに舌打ちしたかと思えば、髪のかきむしりながらボソッと愚痴をこぼす。

「まったく。

アイツといいお前といい、なんで俺のバディはこんな変な奴ばっかなんだ」

シロの泣き声が一瞬だが止んだ。

それは直前の彼のセリフを聞いてのもの。

フレッドにはもう一人パートナーがいる。

それはこの学園の二年生ならば誰もが知っていることであるが、一

年生のシロはきつと気づいていないだろう。

シロの動揺。

誘ったのだ。フレッドがわざと。

泣きながらもちゃんと自分の声は届いていたのだと確信したフレッドは、彼の両肩を掴んで耳元でささやく。

「一度しか言わないからよく聞け」

もう体は限界に近づいていた。

肩に置いた両腕の震えを必死に我慢して、弱ってるのを悟らせたくなかった。

もう剣を持って戦うことさえできないのなら最後の手段に賭けるしかない。

その選択がシロをどんな悲惨な未来に進ませる結果になろうとも、今ここで何も知らないまま死なせてしまうよりはマシだと思ったのだ。

じつと目を見つめてくるシロに、意を決してフレッドが真実を伝えた。

「お前は黒の魔法使いだ」

この世界の魔法使いは四つの色を持っている。

「赤」は火、

「青」は水、

「緑」は風と植物、

そして「黄」色は大地と電気を司る。
その四色は単なる魔法の系統だけでなく、術者の外見や性格にも多大な影響を与える重要なファクター！。

この世界において「黒」の魔法使いとは、四色に属さない五番目の色。

属さないようできて属している色。

なぜなら過去に「黒」と認定された数多くの魔法使い達は皆、元々は四色のいずれかの色を持っていたからだ。

「シロ、お前が『黒』なんて信じられねえ。だから今まで黙ってた。だが自覚しろ。」

お前は黒の魔法使いだ。

過去に何があつたのか知らねえし興味もねえ。

黒に染まつた著名な魔法使いはみんな魔法を使い続けるうちに心が闇に落ちたが、なぜかお前は生まれつき『黒』だ。

それが何を意味するのかわからない。

でも今は余計なことを考えずその力を使え。

その力を、お前や俺やサラサちゃんを守るために使え」

フレッドが熱く語る。

自覚させること。

シロの後ろ向きな態度を直すこと。

初めて魔法を使う上で大切な二つのことを、フレッドは熱い想いを込めて言葉に乗せた。

これがシロの「黒」魔法を呼び覚ますきっかけとなってくれることを願って。

「一度しかと言いながら、結構いっぱいしゃべったな」

そんなフレッドとシロを横目で眺めていたのが「青」のサイダー。
左手に木製の杖。

そして右手には妹サラサの純白の杖が握られている。

二人のことを茶化しながらもその表情は真剣そのものだった。

「てめえ、こんな時にそういうこと言うのやめろ。ぶちころすぞ」
「うるせえ！　こんな時まで俺の名前を呼ばないお前が悪い！
それよかついに気付かれたぞ！」

サイダーの視線の先を追うと、ゴーレムはすぐそこまで接近して
きていた。
フレッドに致命傷を与えた土を飛ばす技の射程にまもなく入って
くる。

いまだ意識が戻らず倒れこんだままのサラサもいる。
もはや一刻の猶予もない状況だ。

「とにかくそういうことだ。」

お前のやるべきことが何かわかるよな」

フレッドは尋ねた。

この場合は二人同時に。

「もうやってるよ！」

先に質問に答えたのはサイダーだ。

両手に杖を構えて呪文を唱えると、大地や周りの木々、果ては大気中からありったけの水を精製しかき集める。

みるみる大きな水風船を作り上げるとそのままゴーレムの全身を包み込んでしまった。

「この技はお前を倒すためのとっておきだったんだけどな！
しゃあねえな！　ここでくたばるよりはマシだ！」

ゴーレムを飲み込んだ水風船が回転し始める。

時計回りにシウルシウルと回りドンドン加速させていく。

左手の杖を横回転、右手の杖は縦回転。

二本の杖の動きに連動して水風船も回り続けて、やがてその水圧は触れた樹木をなぎ倒すほどの威力を持つほどになった。

これだけでも凄い。

中に閉じ込められている土の怪物はされるがまま、洗濯物のようにぐるぐる洗われるだけ。

この世界に電動の洗濯機があるかは定かではないが！

しかもサイダーの新技はここからが凄い。

…そのはずであったが徐々に杖の回転速度が落ちてゆき、それに合わせて水風船の回転も緩やかになっていく。

これだけの大技だ。

サイダーの魔力の方が先に尽きてしまったのだ。

「スーパードクターレイン、これで打ち止めだ！」

声に出すと同時に水球は急激に収縮し、破裂してしまった。
大量の水分を含んで重くなっではいるが水牢から脱したゴーレムは
いまだ生存。

ドサツと倒れこんだサイダーと傍らにいるフレッド達を見つけるや
一歩一歩ゆっくりと近づいてくる。

「くっそー、超だせえじゃねーか。

どこまでネーミングセンスないんだよダサイダー」

これで戦闘不能者が二名。

立つのがやっとのフレッドも含めれば、残る魔法使いはシロ一人の
み。

黒塗りの杖を構えてはみたが、呪文すら知らない彼にできることは
ただただ声を出すこと。

そしてあの時のことを思い出すことだけだ。

「僕は『黒』の魔法使い。

僕には、みんなを守る力があるんだ」

シロの努力に呼応するようにフレッドも続く。

「そうだ。

お前は一度、エルザちゃんとの戦いの時に魔法を使っている。
あいつも同じ『黄』色だ。思う存分やれ」

発動させるのは、かつてエルザの雷撃を打ち消した魔法。
あの時もシロは呪文なんて唱えていない。

「僕は、みんなを守りたい」

シロはさらに強く思う。

次第に杖や体がポカポカ温かくなっていく感覚を覚えた。
背後では頼りになるフレッドがいる。

何も恐れる必要はないのだ。

その支えがシロを、ゴーレムが目下五メートルの位置にまで近づいて来ても怯えることのない強い自信を与えている。

フレッドの声は届かない。

届くわけもない。

我慢して耐えていたダメージが限界を超えて気を失う寸前にも、シロに動揺を与えまいと離れて気絶した。

振りかぶったゴーレムの両腕。
サイダーの魔法で重みがついたままのそれが勢いよく振り下ろされる。

まさにその時だった。

「僕がみんなを守る！」

強い意志が宿った時、シロの周囲に変化が起きた。

そしてゴーレムの攻撃はシロに命中する寸前で停止した。

怪物の両腕を「黒」い霧のようなもやもやが包み押さえ込んでいるのだ。

そのもやもやが急速に広がっていき、腕から肩、胴体へと侵食していく。

頭に到達する頃にはゴーレムの両腕は無くなっていた。

「あと少し」

このもやもやはシロが自分の意思で操っているのか。

どうやって発生させたのかもわからないくらい必死に杖を構えていた。

次第に目がかすみ、全身がだるくなってくるのを感じたがシロは踏ん張り耐えた。

後ろに控える三人のこれまでの活躍を思い出して力を振り絞った。

そして意識からがら、ついにゴーレムの全身を「黒」い霧もやが包み込んだ。

その瞬間、安堵から意識が飛んだ。

そのまま糸が切れたように倒れこみ、杖も手から離れてしまった。

ついに四人全ての魔法使いが戦闘不能に陥ったが、「黒」いもやもやは侵食を続けている。

次第にゴーレムの両足も胴体も飲み込み、最後は頭を残すのみとなったその時

ブツン！

ここで映像が途切れた。

薄暗く閉め切られた部屋の一角。

掌に映し出された漆黒の闇を見つめ、不気味に笑う者の影がそこにいた。

続く。

10・黒い影（後書き）

第三章、完結です。

予告。

レイはどこに行ったのか！ 盗まれた秘宝は？ 最後に笑ってる奴は誰？

それらは第四章（2部構成）で明らかになるはず！

11・シロロロ

11・

青い空、白い壁。

カーテンの隙間から差し込む朝日が眩しい。

左手首に巻かれた包帯をシウルシウルとほどいてゴミ箱に放り込むシロ。

白いカッターに袖を通し、黒のローブを羽織りながらやや駆け足で部屋を出る。

食堂よりも先に目指す目的地は保健室だった。

長い長い4部にもまたいだあの日から、三日が経った。

「黒」の魔法使いとしての素質を開花させたシロの魔法によって窮地を脱した一行は、ゴーレムを退けたのち全滅した。

最初に意識を取り戻したサイダーが学園からやって来た後発チームとの合流を果たし現在に至る。

この戦いによる死者は一人も出ず、全員無事に帰ってこれた。

一番の重傷者がフレッドだった。

魔力を使い果たした上に背中に重い一撃を受けて危険な状態だった。それである日からずっと保健室のベッドで過ごしている。

そんな彼に一日も早い回復を、と願いシロは毎日お見舞いに訪れている。

と、空白期間の説明をしている内にもう保健室に到着だ。
引き戸をガラッと開ける。

「失礼します、あれ？」

入って左手のカーテンをめくって三台並ぶベッド。
いつもの窓際のベッドにフレッドの姿はなかった。

背後からガララと扉を開ける音。

フレッドかと思い振り向くシロの目に映ったのは、白衣を羽織った
妙齢の女性だった。

彼女は学園の保健医のグリーン先生。

シロがあまり気兼ねすることなく話することができる数少ない女の人
だ。

「彼なら散歩に行ってるわよ。

もうすぐ可愛い美少女が来るんだから待ってればって言ったんだけ
ど」

開口一番に答えてみせたグリーン先生。

シロの表情を読み取ったのだろうか。

それも無理ではない話。

学園に帰ってきてからシロは、朝一番に必ず保健室を訪ねている。
三日連続だ。

もうすっかり顔を覚えられ、気に入られてしまったようだ。

シロはうつむく。

きつと、顔は美少女だけど中身は男の僕に会うのが嫌だから出かけてしまったんだ。

そんな感じの表情をしている。

「大丈夫よ」

またもシロの心を読み取ってグリーン先生が語りかける。

「背中傷ももう塞がってるし。

さっきだつて牛乳ゴクゴク飲んでたんだし、明日には君の隣りに戻ってくるわ」

優しい笑顔をふりまくグリーン先生。

男子はもちろんのこと、女子や教師達にも人気が高い。学園中の人間の癒し。

彼女とお話したいがために仮病を使ってまで保健室にやってくる者も多い。

ミスグリーン、二十一歳。

本当の年齢は誰も知らないが、学園に赴任してくる前に離婚をしているとかなんとか少し謎も付きまとう女性だ。

「よかった」

グリーン先生の言葉にほっと胸をなでおろすシロ。

その時ガラリガラリと扉が開く音。

次にシロの目に飛び込んできたのは、引き戸の影に隠れながら眉を吊り上げキョロキョロと室内を見渡している二人の女子生徒だった。肩をすくめるその姿はまるでリスだ。

「どうしたのー？ そんなに怯えて」

より一層穏やかな声で生徒に近づくグリーン先生。

目線を合わせて話しかけると少し安心した様子で口を開く。

「だって、ここに噂の二年生が寝泊りしてるっていうから」

「えー、噂になるような子なんだ。かつこいいもんね彼」

「違うんだよミドリ」 顔はいいけど中身が問題ありすぎなんだよ」

「うっそだー。保健室ではずっと大人しく寝てるわよ」

「気をつけなよせんせ。可愛い子を見たら手当たり次第だからね」

「やったー。こんな叔母さんでいいなら貰われちゃおうかしら」

キャツキャと飛び交うウフフな女子会話。

マークや マークがついていそうな声のトーンで話し合う女子勢。女だらけの魔法学園の性質上、極端に男を嫌う者もいればその逆もしかりだ。

誰が見ても美人のグリーン先生を、あのフレッドが同じ部屋にいて大人しくしているというのが気にかかる。

そのことについて思案中のシロをチラチラと盗み見ていたのが、会話に参加していないほうの女子生徒だった。

そしてハッと何かに気づいたように連れの子に耳打ちをする。

小声ではあったがシロにはしっかりと聞こえた。

「あの子よ」

隣にいた女子がそう口走ったのをシロは聞いた。
次の瞬間。

「それじゃ僕帰ります。さよなら」

言葉だけを置き去りにしてシロは保健室を後にした。

中庭の散歩コースを歩きながらシロは考える。

先発隊の面々は廃宿舎の中から発見された。
ロープで縛られて眠らされていたが、全員が大した外傷もなく回復している。

盗まれた秘宝『コスモプラネット』もそこにあつた。
傷もなく、現在は盗まれる以前の部屋よりさらに嚴重な鍵をかけて
安置されているそうだ。

そして共に森へ向かったパーティのリーダー、レイ。
三年生の彼女だけが、先発隊を探してシロ達と別れて以降行方知れ
ずになっている。

森でシロ達を襲ったゴーレムを操っていたのではないかという疑惑。その真相はいまだ闇の中だ。

闇の中といえばシロだ。

シロが「黒」の魔法使いであるという事実はすでに学園中に広まってしまっている。

どこで誰が漏らしたのかは知らないが、学園にこの事実が流布されてしまった現実。

「黒」に染まった者に対する風当たりは強い。

邪悪なのだ。

その色が持つイメージどおり。

事実、数々の「黒」の魔法使い達が悪事を働いてきたことを歴史が語っている。

シロがフレッドに会いたい理由はここにもあった。

「黒」の力を悪と知りながらも頼りにしてくれたフレッドに会って、認めてほしかったのかもしれない。

「フレッド先輩に会いたい」

陽の当たるベンチに腰掛け、涙声でつぶやくシロ。

静かすぎる風が木々を揺らしながら中庭を通り過ぎていく。

「あなた、フレッドの知り合い？」

いつからそこにいたのだろうか。

シロの目の前にきれいな女子生徒が立っていた。

穏やかな碧眼。

澄んだ声。

風になびく長髪は光を浴びて透き通っている。

スリムな体型で、フレッドより少し低いくらいの長身だ。

白いシャツにモノクロチェックのひざ上スカート。

白と黒を基調にした服装のカラーがシロによく似ている。

「あなたは？」

シロが尋ねると彼女は言った。

「私は三年生のロロロ。」

去年までフレッドのバディだったんだよ」

あつ！　と思わず声を漏らした。

そして森の中でフレッドがぼやいた意味深な言葉の意味をようやく理解した。

フレッドのもう一人のバディ。

それはシロが入学するよりも前のこと。

フレッドが一年生だった頃に組んでいた当時の二年生、つまり現三年生の事を指していたのだ。

「ろろろさん」

一文字ずつ確かめるように、ゆっくりと名前を復唱する。
そうしたら照れくさそうな顔をしてみせた。

「噛みそうな名前でごめんね」

よいしょとわざとらしい声を出して隣に座るロロロ。
スカートがベンチにフワツと広がる。

そして持っていた茶色の紙袋に手をつっこんでガサガサと何かを探
す。

シロは物珍しそうに彼女の横顔を眺めていた。

「食べる？」

目の前に差し出されたのはチュロス。

甘い砂糖をまぶした長いパンをつき出し、顔の前でゆーらゆら
と振る。

だけど今は何かを食べるような気分ではなかった。

チュロスのことなど気にも留めず、胸に溜まったもやもやをどうに
かして消し去りたい気持ちでいっぱいだった。

「僕、どうしたらいいんでしょう」

「シロ君はどうして魔法学園へ来たの？」

いきなり変な事を聞かれたものだ。

しかしこの質問は、女子生徒にしてみれば実はとても興味を引く事柄なのだ。

魔力は基本的に女性にしか宿らない。

小学校と中学校の義務教育を終えれば大抵の男子は魔法を扱わない普通の高校に進むか、働きに出るものだ。

シロはそうしなかった。

苦手な女子がたくさん在籍してることを承知で魔法を習いに来た理由とは？

雲を見上げながら質問を続ける口口口。

「男の子が魔法学園に来るなんて珍しいことなんだよ。

フレッドはハーレムを作るっていう、よこしまな野望を持っているサイダー君、だっけ。

彼は大切な妹を学園に一人で通わせるのが不安だったから、なんだって。

どちらも本人達にとっては凄く重要な理由だ。

シロ君にもここに来た目的があるんじゃないのかい？」

語尾のイントネーションを吊り上げてシロの方に目を移す。

全てを見透かすようなその視線から逃げるように顔を落とすシロ。

少しだけ間が空いた。
そして。

「僕は…」

シロが語りはじめる。

自分の胸の内に秘めた想いと、過去を

続く。

12・髪の長い女（前書き）

またイラスト描いてみました

12・髪の長い女

> i 3 0 3 8 3 — 3 7 2 1 <

1 2 .

嵐の過ぎた昼下がり。

だが本日は晴天なり。

この場合の嵐とは天候のことではなく、休み時間になる度に保健室を訪れる怒涛の見舞い客のことを示している。

秘宝奪回任務の最中、重傷を負って保健室に担ぎこまれた「赤」の二年生フレッド。

丸一日寝込み、その後の二日間を退屈なベッドの上で過ごした。美人の保健医と一緒にいて口説くチャンスだったのだが、ダメージが深刻でそんな気分にもならなかった。

あれから体の調子も良くなった。

今朝はご飯も食べられたし、散歩にも行けるくらいに回復している。ハンガーに掛けられた上着を丸めて腕に抱え込み、保健室を後にしようとする。

「本当に大丈夫なの？ もっと休んでいけばいいのに」

学園の保健医のグリーン先生が彼を呼び止める。

振り向いて真剣な表情を浮かべて彼は言う。

「これ以上授業をサボるわけにはいかないんです」

この発言にグリーン先生はあつと驚く。

そりゃそうだ。

学園の為に働いて受けた怪我が原因なのだ。

それはサボるとは言わない。

完治するまで授業を休んでも誰も文句は言わない。

この発言は十六歳の生徒らしからぬ、とても熱意に満ち溢れた好青年のものであった。

「あらまあ、真面目なのね」

グリーン先生はちよっぴり瞳を潤ませ、うっとりとした甘い声を出した。

「だってもつたいないじゃないか。

授業を休むってことは、それだけ制服美少女達と一緒にいられる時間が削られてしまうつてことだからな。

それに俺の野望の最終地点は教師になってMYハーレムを作ることなんだ。

テストで良い点をとるためにも授業は休めない

…なんて発言は、保健医の手前危ないので控えることにした。

好印象を持ってくれている美女の評価を下げないためにあえて喋ら

ない。

三日間の保健室での生活の中で、フレッドは「空気を読む」というスキルを身に付け始めていた。

それに。

「早く元気にならないと。一人、うるさい奴がいるんです」

じつと先生の目を見つめて、照れくさそうな顔を作ってみせた。

噂をすればなんとやら。

コンコンと二回ドアをノックする音。

引き戸をガラツと開けて入ってきたのは彼のバディだった。

「フレッド先輩、今朝は挨拶にこれなくてすみませんでした」

その後輩はフレッドの顔を見るや一番に謝罪をしてきた。

散歩で留守にしている間にすれ違いになってしまったのだ。

そのことをグリーン先生から聞かされていたフレッドは難しい顔をしてその後輩に強く当たる。

「お前な。恋人じゃないんだから一日に何回も病室にくんな」

「恋人ではないけどパートナーです。心配なんです」

後輩も強く出た。

気が付くとグリーン先生が彼のためにパイプ椅子を用意してきた。先生なりの自分を引き止めるためのメッセージと判断し、フレッドは上着を抱えたままベッドに腰掛ける。そして彼も差し出された椅子にちょこんと座った。

「さつきサラちゃんとその兄貴が来てたぞ」

本日の休み時間の出来事を後輩に聞かせてみせる。一緒に任務に同行した「青」のバディ達は、フレッド達を守るために魔力を使い果たすまで頑張ってくれた。ケガは無く、魔力も回復し、兄も妹もピンピンした状態で見舞いに来てくれた。

「元気そうだったぞ」

「それはよかったです」

「その前にはエルザちゃんも来てたっけな」

別の休み時間の出来事も付け加える。

その名前に後輩の体がビクリと反応する。

入学初っ端から雷の魔法を放って痛めつけてきた「黄」色の魔法使い。

その後も彼女とフレッドは交流があり、お互いの相棒よりも良好な関係を築いている。

「お前に会えなくて寂しかったぞ」

「僕はあまり会いたくないです」

「先輩の前のバディに会いました」

今度は後輩のシロが、フレッドに今日の出来事を話し始めた。嬉々とした表情のシロとは対照的に、それまで笑っていたフレッドの表情がみるみる内に曇っていく。抱えていた上着を急いで羽織りながら静かな声でシロに言い聞かせる。

「あいつにはあんまり関わるな」

小声で聞こえなかったのか。

シロはさらに明るい笑顔で話を続ける。

「美人ですよねロロロさん。それに優しくて気さくで。初対面なのに僕、全然緊張せずに話せたんですよ」

「あいつの話もすんな」

一段階、声のボリュームを上げたフレッド。

そのただならない様子に気づいてシロが押し黙る。

怪訝そうな顔で、だけど嬉しさから来る笑顔を隠しきれずにフレッドに尋ねてみる。

「どうしてですか？」

「シロ君が魔法学園に来たのは、どうして？」

少し時間はさかのぼり、今朝の中庭に舞台は巻き戻る。

フレッドを探していたシロの前に現れたのは、フレッドの元バディを名乗る美少女ロロ。

彼女の素朴な質問にシロは正直に全てを打ち明けた。

「僕の家は、イリスア帝国との国境にある貿易商です」

イリスア帝国とは、魔法学園のあるオークロット領と隣接する大国である。

マジックスポットが無いその国では魔法に替わる武力として、刀剣などの近代武器を扱った武術が広く推奨されている。

そのため魔力を持たない大陸中の男子は皆イリスアに憧れ、その国で職に就き、家庭を持つ。

イリスア帝国は今や、ミシディア大陸一の国土と圧倒的兵力を保有する強大な国へと膨れ上がった。

要約すると。

シロの実家は魔法を扱う土地と剣を扱う国の間にあり、シロは魔法側の生徒という図式だ。

その前置きを踏まえてシロの話は続く。

「中学までの友達はみんなイリスアの騎士に志願したり、こっちで傭兵の仕事をしたりしてます。

でも僕は運動が苦手だったから魔法使いを目指すことにしたんです。

女の姉妹が多いから、微力だけど生まれつき魔力が備わってたから」

喋り続けるシロの声が徐々に小さくなっていく。

女性と話すのが苦手だからというより、むしろ話すこと自体がづらいといった感じの顔だ。

まるでその先を話したくない。

結論を誰かに知られたくない。そんな感じの顔だ。

「つまり仕方がなかったってことだね」

ロロロはあっさりと結論を言い当てる。

言葉に出して言われたこととげんなりと凹むシロ。

「いいじゃんそれで」

彼女のあっけらかんとした態度に思わず二度見する。

ロロロは立ち上がり、シロの正面でくると回ってみせた。

そしてシロの方に向き直ると、太陽のような眩しい笑顔で言い放つ。

「シロ君まだ十五歳だよ。

周りの子達だってそんなに深く将来を決めてたりしないよ。

現在は自分に出来る最良のことをやってればそれでいいんじゃないかな？」

ふたたび両手を開いてくると回る彼女。

ゆるくウェーブのかかった髪も一緒に揺れる。

春の終わりを告げる風を振りまいて、彼女は回る。

「特例もいるけどね。

フレッドはちゃんと？ 将来を見据えて入学してきてるけど、いつ目標が別のことに変わるか分からないよ。

だってシロ君達はまだまだ若くて、これからいろんなことを知っていくんだから。

四つの色なんかで決められちゃうほど、魔法使いの人生は退屈なものじゃないんだよ」

全てを包み込むような優しい笑顔をまとう彼女は、まるで全てを見透かすかのような言葉を紡いでいく。

そんな不思議な魅力を持つロロロという少女に、シロは出会った。

その夜。

部屋の窓を開け放ち、ひょっこり顔を覗かせると隣の部屋の窓に明かりが付いている。

三日間無人だった隣部屋にようやく主が帰ってきたのだ。

結局フレッドは理由を話さなかった。

彼女に関わるなと警告したその理由を。

フレッドとロロロはかつてのバディ。

しかしフレッドは彼女のことを嫌っている、というより避けている。

一つだけシロの中ではつきりしている事がある。

ロロの言葉によつてずいぶん気持ちが楽になった。

心に溜まっていた黒いもやもやが、彼女のともし火によつてずいぶん取り払われたということだ。

フレッドが納得のいく理由を話してくれない限り、シロは彼女のことを嫌いになる自信がなかった。

「あれ？」

ベッドに入る間際のことだった。

大の女性恐怖症だったシロが、自分の中にある異変に気が付いたのは。

「そついえば僕、ロロさんと話せてた」

続く。

12・髪の長い女（後書き）

第四章、完です。

前の章が長かったので今回は短く2部構成です。

予告。

第1部で名前を呼ばれてたバディが登場します

13 ナンパしようぜ

13 .

「ナンパしようぜ」

親指を突き立てながら言い放たれた一言は強烈だった。

少なくともシロ少年にとっては全くもって未知、未体験ゾーンの行いであつたのだ。

女の子を遊びに誘うという行為が。

「絶対無理です！ ムリムリムリムリムリ」

大げさすぎるほどに意思表示をしてみせる。

その手をガシツと掴まれ動かせなくなるほどに強く握られ。

そしてズイツと顔を近づけてこられ追い討ちをかけられる。

「お前がちょっとでも女と喋れるようになったのは喜ばしいことだ。女の子だって同じ人間だ。こんなの慣れた。荒療治ではあるがこのオーソドックスなやり方が一番手っ取り早い」

フレッドが鼻息を荒げてまくし立てる。

一体、なぜこんなことになったのか。

季節は梅雨。

蒸しむしとした日々が続く。

衣替えも終わり、重たいローブを脱ぎ去った生徒たちはより開放的な日常を望んでいるはず。

フレッドという男の狙いはそこにある。

後輩のために動くなんてのは口実で、必ず裏があるのだ。

「仕切りは俺がやる。

お前は一步下がってうなづいてるだけで良いんだ。

俺が上手く進めてバディをゲットしたら、片方はちゃんとお前にわけてやる」

などと息巻いて部屋を飛び出したのもかれこれずいぶんと前のこと。

数十組のバディ（女子二人組に限る）に声をかけたが一向に釣れる気配がない。

収穫といえば、ブラウスから透けて見える色とりどりの下着を観察できたことくらいだろう。

こいつに限っては魔法使いの四色など何のその。

生徒の数だけ様々な柄や模様のバリエーションに富んでいた。

「お前が後ろでつまらなさそうにしてるから女の子が退屈すんだ」

フレッドは文句を言う。

するとシロも負けじと言い返す。

「先輩がいつも悪さをしてるから、女の子が警戒してるんですよ」

正解は後者。

毎日のように学園の美少女に声をかけて回るこの男子生徒は、全女子生徒から避けられている。

魔法学園の女子ネットワークにもしつかりと記されている。

『赤の二年生に要注意』と。

その時おもわずクラツときた、めまい。
不意にフレッドとシロを襲う立ちくらみ。
すぐにそれは目眩ではないことに気付く。

「また地震だ」

秘宝を奪還しに森へ向かった任務。

そこで怪我をして帰ってきてから一ヶ月の月日が流れた。

その頃から、魔法学園があるオークロット地方全域に小規模な地震が頻発している。

「黄」色の魔法使いによる観測の結果、体感できないものを含めると回数は三桁にのぼる。

死者や大きな被害は出ていないから良いものの、いまだかつて無いこの異常現象に生徒達からも不安の声が上がっている。

「最近多いですね、地震」

「そういえばさ。」

俺のクラスでこの地震を起こしてるんじゃないかって噂になってる奴がいてな……」

そこまで言いかけてフレッドは言葉を中断して走り出した。
その向かう先に女子生徒を確認し、シロは仕方なさそうに後に行く。
そして。

この男がただ女の子に声をかけるためだけに近づいたのではないこ
とをすぐに思い知る。

さっきの地震のせいか。

彼女の足元に大量の本が散乱しているのが見えたのだ。

「ごめんなさいっ」

せつせと本を拾い上げるフレッドに、申し訳なさそうに頭を下げる彼女。

ミントグリーンの髪を左右で対称にくくり。

薄いピンクのカーディガンが可愛い彼女。

紺のスカートは流行に逆行してヒザまで届き、そこから紺の靴下が
チラリとのぞく。

「いいよこんくらい。それより怪我は無い？」

「あ、ありがとうございます」

シロも追いついて最後の本を拾い上げる。

それを手渡す時の彼女の上目遣いに少し緊張してしまう。

これまでに知り合った女子はエルザといいサラサといい目線の高さが
近かった。

自分よりも背の低い女子生徒と顔を合わせるのは慣れなくて妙な気分
であったのだ。

「ありがとうございました。えっと…」

言葉に詰まる彼女に助け舟。

「俺フレッド。色は赤、よろしく」

「僕は16組のシロです」

二人は笑顔で自己紹介。
すると彼女はたどたどしい口調ながらも丁寧に返してくれた。

「15組のメローネです。『緑』です」

テレながら自己紹介するメローネを見てまたも緊張。

上述の二名とは外見的な違いだけでなく、内面的にも大きな違いがある。

あまり前に出たがらない新鮮なリアクションに思わずドキツとさせられる。

そしてこのタイプの女の子となら自分のペースで話が出来るとような気がする。

ニヤついたバディの視線を横から感じて慌てて話題を振ったりもしてみるシロ。

「緑の魔法使いつてはじめて出てきたかもしれないね」

「出てきたってなんだよ。さっき声掛けた子達の中にたくさんいただろうが。」

「つか保健のグリーン先生も緑だぞ」

ここで解説をしよう。

魔法使いの四色における「緑」は平和を象徴する色とされている。性格的にも風のようにゆったりとして、植物のように穏やかな心の持ち主が多い。

フレッドの「赤」に弱い属性だが、魔法使い同士の相性は意外と良い。

それにはちゃんとした理由があるのだがまあ今回はそこまで語らずともよいだろう。

「やっぱり一緒にいて癒されるのは『緑』の子だよな。

こうして知り合えたのも何かの縁だ。バディの子にも挨拶したいんだけどなー」

きよろきよろと大げさに辺りを見回して、なんとかこの関係を維持しようと画策するフレッド。

その目は獲物を狙う野生動物のような鈍い光をたたえていた。

「あ。モ力御姉様ならあちらにいますよ」

「御姉様？」

サイダーとサラサの様に、また兄弟姉妹でのバディかと焦るシロ。フレッドの方は”御姉様”と聞いてむしろ血の繋がった兄弟や姉妹ではないと、なぜだか知らないが確信が持てた。

だがしかし。御姉様の件ではなくむしろその前に付けられた固有名詞の方に焦る

フレッド。

「え。モカってもしかして…」

「フレッド君？」

メローネが指差す先に人影あり。

ひとまわり小さめのシルエットが彼の名前を呼ぶ。

マリーゴールドの髪が風になびいたところで次回へと、

続く。

14・正論と感情論

14・

張り詰めた空気。

それを作り出したのは彼女。

彼女の特徴を一言で表すとすれば『清潔感』という言葉がもつともふさわしい。

優等生タイプといったところか。

金の髪を左右対称にくくっている点はバディのメローネと同じだがその結び方、形状に違いがある。

付け根でしばって垂らしてあるメローネとは違い、モ力はそこからさらに一手間かけて縦に回転するロールを形成している。

毎朝セットするとなると大変な労力だ！

とまあ。

彼女ことモ力のそんな説明はそこそこにして、シロが場の空気を読んで尋ねてみた。

「二人はお知り合いですか」

二人の返答にいくばくかの間が空いた。

目を合わせるわけでもなく、先に回答する権利を無言のまま譲り合っている状態。

早急に見切りをつけたフレッドがその質問に答えると、モ力はその後に続いた。

「特に仲が良いわけでも悪いわけでもない。言ってみれば他人だ」
「私達は『黄』色と『赤』色。それも仕方がないことかもしれないね」

第7部のおさらいも兼ねて説明しよう。

魔法使いの四色はそれぞれの色同士が密接に干渉しあってそこにある。

「黄」色の三年生レイとはじめて顔合わせをした時にも言われていたことだが、赤と黄色はそこにあって特に上下関係があるわけではない組み合わせ。
付き合いやすくもあり、最初のうちは中々とつつきにくいこともある関係だ。

しかし人間関係というものはテンプレート通りにいくものではない。
それはフレッドとモカのやり取りを見ていれば誰もが思い知る真実である。

「あの。モカ御姉様」

「フレッド、私の大切なバディに気安く近寄らないでください。貴女も早くその男から離れなさい」

こんな感じである。

バディにさえ有無を言わせない石頭ぶりにカチンとくるフレッド。
困り顔を浮かべて眺めるシロがポツリと思いを漏らした。

「仲が悪くないようには見えないんですけど」

「正直言つて、二年生以上で彼の悪名を知らない生徒はいませんわ」

モカというこの女子生徒は、二年生にしてこの学園の生徒会役員に選出されている。

立候補に加えて多数の生徒達からの推薦付き。

容姿端麗、成績優秀、次期生徒会長との呼び声も高い。

かたや学園の問題児。

かたや向こうは学園の優等生。

身だしなみを見比べてみれば一目瞭然だ。

しわの付いたシャツをだらしく垂らしたフレッドと、ピシッとアイロンをかけたシャツをスカートに入れているモカ。

あまりにぴちつとしすぎているのも考え物か。

発育の良い二つの胸のふくらみが余計に主張気味になる仕様で、唯一そこだけが彼女のけしからん要素になってしまっている。

その双丘を横目に見ながらこの男がとつさに話題を切り替える。

「そつえばさっきの話の続きな。

最近頻発してる地震を起こしてるんじゃないかって噂の奴っていうのがな、何を隠そうこいつだ」

スビシと指し示したるはモカ。

話しかけられたシロはいきなりの話題転換に戸惑うが、その話の内

容にもつと戸惑う。

狭い規模ながらも魔法の力で地震を立て続けに発生させるのは相当のものだ。

こんなに小さな体に、

それだけの魔力を秘めているということか、とシロは驚く。

「驚くのそこじゃねーだろ」

言葉には出さないがその反応を見てフレッドがツツこむ。
ボケたつもりではないシロに対して容赦なく。

ちなみにこの地震は人為的なものではなく、自然災害であるという見方が一般的だ。

本来に魔法の力で引き起こそうとなればとてつもない人員と魔力が必要となり、それを行う有意性が見つからないからである。

「えっ。じゃあ何でモカさんがウワサに？」

「体型見ても」

再び指差したるフレッド。

このモカという少女。

背格好はシロとあまり変わらない。

しかし低身長とはあまりに不釣り合いな胸のボリュームに、清潔感を強調する白と黄色を基調とした服装。

その結果、太く見えるのだ。

女性に対して非常に言いづらいことではあるのだが、太って見えてしまう。

衣類を全て取り去った彼女をお見せできないのが非常に残念ではあるが、とりあえず彼女は着膨れしやすい性質なのだ。

その体型が、イコール地震を起こすという発想に繋がった時。
シロはとっさにうつむいてしまった。

いきなり襲ってきた失礼な笑いの神様に耐えられず、しかし笑ってはいけない状況であるのを理解した上で堪えた結果だ。

そしてこれを言われた彼女はより一層不快感を露わにした表情を作
って応戦。

「言い返せなくなったら今度は見た目ですか。

相手のコンプレックスを突くのは人として最低の行為ですよ」

「コンプレックスって認めたな」

フレッドの後ろから言葉に表せない変な声が漏れ出した。

「キーツ！ もう許せませんわ」

端正な顔をくずした真っ赤っかな表情で半泣きのモカ。

先ほどまでの凛々しい彼女はもうどこにもいやしない。

そのギャップに少しドキリとしたシロ。

バディのあられもない姿におろおろするメローネ。

フレッド。

この男だけは常にブレない。

ここまで来ればしめたものだといった得意げな顔でこう切り出すの
であつた。

「許せないか。

じゃあどうする。魔法対決でもするか」

「お断りします。」

私は魔法の力をそのような野蛮な行為に使うことがキライです」

涙を引つ込めて切り返すモ力。

フレッドが得意げに構えてみせた刀も、この反応の前には一旦引つ込めざるを得ない。

だが彼の口撃の方は変わらずに全開だ。

「でも魔法の力は昔から軍事力として使われてきたんだぜ。

オークロットが今は平和なのは、隣国が持つ強大な兵力に負けないだけの魔法兵力を有しているからだ」

「そんなこと学生の私達には関係の無いことですわ」

正論で攻めるフレッドと、感情論で対抗するモ力。

男と女が口喧嘩をした時にしばしば見られるこの光景は魔法学園が舞台でも変わらない。

こうなるとフレッドの方から矛を収めざるをえない。

早々に言い負かすことを諦めてこちらも思ったことを声に出す。

「お前それ言ったら話終わっちゃうだろ」

「もう貴方と話すことなどありません。」

歴史は否定しません、しかし魔法は戦うためだけの力ではないと信じています。

それを無闇に人を傷つけるために使うことなど言語道断」

鼻息を荒げてまくし立てるモ力。

女性を形容する際に選ぶべき言葉ではないが事実でもある。

「じゃあもしもの話をしよう。」

メローネちゃんが悪い魔法使いに操られてお前を攻撃してきても、お前はメローネちゃんを攻撃したりしないのか？」

フレッドからの問い掛け。

人間や動物の思考を支配して意のままに操る魔法は存在する。

「青」の魔法使いが主流に扱っている理由は、生物の体の60〜70%が水分であることに起因している。

しかしモ力は、この場合の悪い魔法使いをフレッドのこととして捉える。

悪魔のささやきによってたぶらかされていたとしても、決して後輩を傷つけたりはしない。

そんな強い自信を持って彼女は答える。

「もちろんですわ。」

私はバディのこの子のことを大切に思っていますから」

「大切に思っていますから。キリッ！」

モ力の口調をわざとらしく真似て復唱するフレッド。

語尾に持ってきた擬音をいやらしく強調させて。

「そこまで言うんだったら良い方法を思いついたぜ。」

魔法の実力とバディへの思いやり。両方を同時に計れる恰好の魔法対決をな」

そう言って再び刀を構えるフレッド。

思わず身構えたモカの胸にのみ目をやった後、鞘の部分を地面に突き刺してずらす。

土を抉りながら進み、一本の短いラインを引き終えてから彼は声を大にして叫んだ。

「その名も、『第一回チキチキ。バディ吹っ飛ばし競争』対決だ！」

シロ君は、嫌な予感しかしなかったと言います。

続く。

14・正論と感情論（後書き）

どっちがとはあえて書きませんが、なんとかマギカの某ママさんをイメージして書きました。外見も性格も。

折り合いのため性格の方がキツくなってしまうましたがあの感じをイメージしてくださいませ。

15 パートナーは投げ飛ばすもの

15 .

フレッドが提案した魔法対決。

それは己のバディと信じ合わなければ勝つことのできない魔のゲームであった。

それでは早速、対決方法の説明に入る。

勝負は魔法の力でバディをどれだけ遠くまで投げ飛ばせるかを競う。投げ飛ばすとは文字通り、人間自身をボールか何かに見立てて吹き飛ばすのだ。

その飛距離を競う。

なお一回勝負ではあるが、体力・魔力に余裕があれば二度目以降の挑戦も可能。

その逆、すなわち不戦敗を選ぶもこれまた可能とする。

先攻はフレッドとシロ。

後攻はモカとメローネ。

どちらのバディも前者が投げ手、後者がボール役である。

「要するに一年生をより遠くまで飛ばした方の勝ちだ。

ただ後輩を怪我させたら失格負け。相手を思いやってほとほどの力で投げるもよし。

果たしてそれで勝てるかどうかは分からないがな」

ニヤリと不気味な笑みを浮かべるフレッド。
そう。

この男に限って、パートナーの男子を気遣って手を緩めるなんてことがあろうはずがない。
全力で投げ飛ばす気満々だ。

「なんてことを考え付くんですか貴方は」

まさに外道。

説明を聞いただけですっかり青ざめてしまった一年生メローネを飛ばうように、彼女のバディのモカが割り込んで抗議する。
あのー、とその影からは提案者のバディすらも割り込んでくる。

「今回はかりはモカさんに賛同するわけにはいきませんか？」

「いくわけねーだろ」

その表情は喜びに満ちていた。

少なくともシロの目にはそのように映ったという。

そして彼はバディの決断を悠長に待ったりもしない男だ。

やる事が決まればあとは炎のようにまっすぐ突き進むだけ。

こうやってシロという少年は地に足が付かぬままスタート地点にまでやってきたのであった。

「いくぞシロ！」

フレッドが奮起する。

手にした妖刀を鞘から解き放ち、火を纏った刀身をゆるやかに構える。

その炎はたちまち空気を飲み込んで膨れ上がる。

しかし不思議と熱くはない。

術者自身が生み出した炎の温度を極限まで低く保っているのだ。

「いいかシロ。着地のタイミングで魔法を使えば大丈夫だ」

こいつらからは見えないくらい遠くまで飛ばすから、安心してあの黒魔法使っていいぞ」

ますます火炎を噴き上げながらのアドバイス。

この勝負はバディが怪我をしてしまえばそれだけで負けてしまう。

だからボール役のシロもまた、着地の寸前で魔法を使ってその衝撃を最小限にとどめなくてはならない。

そのため、いまだ魔法が安定していないシロは必死になって呼吸を整えている。

やがて意を決したかのように前を見据えて力強く答えた。

「別の意味で安心できません。でもなんとかやってみます」

「よく言ったア！」

そして炎刀が振り下ろされた。

昇り龍の如き火炎がシロの体を押し上げ、舞い上がる。

ぬるま湯のような温かい炎の熱気がじりじりと背中を焼いていく。

あっという間にシロの姿は中庭を抜けて校庭の方にまで飛んでいてしまった。

「よし。次はお前の番だ」

「あなたそれでもあの子のバディですか！」

容赦の無い返しにモ力が叫ぶ。

耐性の無い一年生メローネは生気が抜けたように震え上がり、ふつと気を失い彼女の肩にもたれかかってきた。

あわわと支えた全身に、彼女の命の重さがずしりともたれかかってくるようだ。

一方。

バディが飛んでいった方角を見つめるフレッド。

無事に魔法が発動したのを見届けると再度振り返り、メローネの体を支える彼女を一喝した。

「お前こそ本当にメローネちゃんのバディなのかよ」

あまりに唐突。

悪ふざけモードから一変した彼の表情は真剣そのもの。

「お前が言っな」などと言わせる雰囲気ではない。

そんな彼がモ力を見つめてこう言った。

「一年生の可愛い女子は全員マークしてた。

だけどメローネちゃんのバディがお前だってこと、さっき会ってみるまで知らなかった」

思い出される、先刻のモ力との対面。

案内された先にいた彼女をはじめて見たときの彼の動揺。

あの入学式からかれこれ二ヶ月が経った。

この男ほどが持つ情報網ならば、美少女メローネのバディがこれまた美人の二年生モ力であることを見過ごすはずがない。

「何が言いたいんですの」

メローネを支える手がじわりと湿る。

やや真剣にはなりきれていないが見つめ返すモ力の目を見て、ゆっくりと彼は言った。

「お前。一度でもあの子の名前を呼んだことがあるか」

これが真意であつた。

今日の彼女を見る限り、一度もメローネという名前を呼んでいないことにフレッドは気が付いていた。

名を呼ばず、悪評轟く者は有無を言わず引き剥がし寄せ付けず、魔法対決にも応じさせない。

彼女のその過保護さをこの男は見過ごせなかった。

モ力は言葉を失いうろたえる。

そして一年前のかつての自分を思い出していた。

一年生にとってバディを組む二年生は、親や教師と同じくらいに尊敬し頼るべき相手。

何不自由なく裕福に育てられた親元から離れてからも彼女は教師やバディにちやほやされて過ごしてきた。

いざ自分が上級生になった時、下級生にどう接してやったらいいのかわからずに過ごしてきた。

「『この子』とか『彼女』とか『貴女』とか。バディはただのお人

形さんじゃないんだぞ。

子宝でも渡されたかのように大事にして、ちっとも魔法使いとしてのメローネちゃんを見てないじゃねえか」

うつむくモカ。

その視線の先に、ゆっくりと顔を上げるメローネの瞳があった。

まっすぐと見つめるエメラルドグリーンの瞳。

その奥底にあるのは、不安に怯える彼女自身のクロムイエローの瞳だった。

モカとメローネ。

彼女達バディを眺めながら、再度フレッドは校庭の方へと目を向ける。

漆黒の彼の瞳はどこか物憂げで、まるで普段突き放してばかりいるバディのことを案じているようであった。

「バディってのは可愛がるだけじゃ駄目なんだよ。

まだまだ未熟なあいつを育て導いて、そして俺もあいつに助けられる。共に成長し合えるパートナーだ」

湿気を運んでくる温い風が吹き出す頃。

メローネはもたれかかっていた彼女の肩から起き上がり、自分の足で大地に立った。

それを見届けた後に彼は小走る。

「俺は先に行くぞ。シロが無事かどうか見てこないと」

そのまま振り返ることなく彼は行ってしまった。

残された黄色と緑のバディは同じ方角を向いて立ち尽くしている。
彼の背中を眺めながら。

温い風が彼女達の背中を後押しするように吹いていた。

「まったくむちゃくちゃですわ。」

こんな勝負、勝ったって何の得にもなりはしない。一年生を危険な目に遭わせるだけの無意味な行為ですわ」

綺麗にロールしたマリーゴールドの髪をなびかせて彼女は言った。
隣りに立つミントグリーンの髪の彼女は無言でモ力を見つめる。
その表情には若干の影を落しながらも、さっきまでの怯えた様子はなかった。

彼女なりの誠意を込めてバディを見つめる。
それに応えるようにモ力は、これまで背け続けてきた彼女の姿を確認するようにゆっくりと振り向いたのだった。

「でも、言われっぱなしは悔しいですわね」

「モ力御姉様。私なら大丈夫です」

左手を差し出す彼女。

空に向けた手のひらは、触れるのが躊躇われるほどに小さく幼い。
壊れてしまうことを恐れて触れられなかった儂い原石が、自らの力で輝こうとしているのを感じた。

親も兄弟も教師もいない。

ここには彼女と自分しかない。

使命感にも似た勇氣に突き動かされたモ力はいかに決意した。

「行きますわよ。メローネさん」
「はいっ」

彼女達は手を重ね合う。

そして一歩ずつ前へ。

始まりを示すラインに並んで立ち、そこから呪文の詠唱を始める。
するとメローネが立つ足元の土が円柱状にせり上がり、やがて直角に曲がってゆるやかに前進を始めた。

地面スレスレの上空を、土のベルトコンベアが彼女を乗せて目的の地へ運ぶ。

徐々に徐々に加速していくモ力の魔法。

フレッドを追い抜き、風に乗せてどこまでも進むその乗り物の上で彼女も呪文を唱え始めた。

先に飛んでいった一年生シロの待つ地点まであと十メートル。

失速しだした土の乗り物から彼女は力強く飛び立った。

大地から大空へ。

その日「緑」の魔法使いは風をまとい、キラキラと輝きながら羽ばたいたのだった。

はたして勝負の行方はどうなったのか。
それはまた、別の機会にお話しましょう。

続く。

$$\begin{array}{r}
 > \\
 & i \\
 & 3 \\
 & 1 \\
 & 5 \\
 & 4 \\
 & 7 \\
 \hline
 & 3 \\
 & 7 \\
 & 2 \\
 & 1 \\
 <
 \end{array}$$

15 パートナーは投げ飛ばすもの（後書き）

第五章、完です。

イラストは手書きではなくあえて全部ライン書きしましたとさ。

予告。

全12章を予定してるので、次が折り返し地点です。

16・紫の魔法使い

16・

雨雲が立ち込める初夏の午後。

学園に強い勢力の嵐が近づいて来ている。

いまだ地震活動の活発なこの地域に、学園では洪水や地すべりなどの災害対策が急がれている。

その日、フレッドの姿はなかった。

貴重な男手ということで教師に駆り出され、ぼやきながら強風の中へ行ってしまった。

残された彼のバディは教室で一人静かに本を読んでいる。

本のタイトルは「雨宿り竜の魔法炎」。

今、魔法使いの若者達の間で最も人気のあるサブカル系ファンタジー小説。

落ちこぼれだが努力して成長していく主人公に皆が共感を受けるのだ。

シロもそんな読者の一人である。

主人公の境遇が自分に重なり、その主人公が使う炎の魔法がバディのフレッドに重なる。

その主人公が、氷を操る仲間と共に悪の魔法使いとの戦いを繰り広げている最中のことだ。

ドンと強い衝撃。

文字を追うのに夢中で反応が遅れた。人がぶつかってきたんだ。

床に落ちた本を拾おうと屈んだシロの背中に、甲高い女子の声が降り注ぐ。

「あーら、ごめんあそばせ」

「あんた男のくせに力仕事に呼ばれてないんだ。カワイソー」

嘲笑を含んだ言葉だけ残して教室を後にする。

彼女達は同じクラスの女子生徒。

今時のオシャレに命をかけるギャル魔法少女で、制服の上から化粧も香水もバンバン振りかけて、パンツが見えそうなくらいスカートを短くつめている。

彼女達は入学初日からシロのことを良く思っていないかった。

そんなシロが「黒」の魔法使いであると知れたあの日から陰湿ないじめが始まり、それは次第にエスカレートしている。

その行為をひたすら黙って耐えてきた。おとといも昨日も、そして今日も。

「こんにちは」

聞き慣れた、だけどさつきとは違う声。

顔を上げるとメローネが両手にカバンを抱えて立っていた。

先日知り合った「緑」の魔法少女とはあれから本好き同士として交流が続いている。

「あ…」

いきなりのことで言葉が出ない。

緊張しているわけではない。とっさのことに、何と言ってあいさつ

をすればいいのかわからなかった。

手に取った本に目を落とすとホコリが付いているのに気付く、慌てて謝った。

「ごめんね。借りてた本、ちょっと汚しちゃった」

表紙をパンパンと手で払い、申し訳なさそうに差し出す。

「いいよそれくらい。どこまで読んだ？」メローネは笑顔で許してくれた。

「主人公が雪の中に埋まっちゃうところまで読んだよ」と照れながらシロが言う。

「そこ面白いよねー。私そのシーン大好きなんだ」と嬉しそうに話すメローネ。

「私もそこでいつも一分間くらい笑いが止まらなくなるわー」とサラサ。

サラサ！？

あまりに唐突に溶け込んできた彼女の存在にビクつくシロとメローネ。

かつて秘宝の一件で共に戦った「青」の魔法少女がいつの間にか教室に入ってきていた。

「なによ、お化けでも出たような顔して」

透き通る瞳の彼女が冗談を交えながらシロを見る。

そのままメローネの方へ視線を移し、ペコリとおじぎをした。

「一年生だね。私『青』のサラサ。シロ君の友達」

「『緑』のメローネです。よろしく」彼女も、深々とお辞儀をした。

ここで魔法使いの四色について注釈を入れよう。

水を司る「青」と、植物を司る「緑」。

お互いの相性は言うまでもなく良好。上下関係のない相互利益の関係を結べる理想のペアの一つ。

その「青」の彼女はニヤニヤと不気味ながらも可愛らしい笑みを浮かべて尋ねてきた。

「それにしてもシロ君も隅に置けないなあ」

コノコノと肘でグリグリされ、その意味を知るシロは顔を真っ赤にしてあたふたと否定する。

「ち、違うよ。メローネさんはただの友達だよ」

「ただの友達ってそんなキツパリ言わないであげなよ。メローネさんはどう思ってるかわかんないじゃん」

「えっ!?!」

彼女のその一言が、ここにいる文学系の男女にかつてない衝撃を与える。

本に記された内容によって与えられる感情とは根本的に違う。

シロもメローネも恋人はおるか異性に話しかけられただけで緊張してしまうほどの恥ずかしがり屋。

互いの存在が、人生で最初に出来た異性の友達と言っているいかに。

「私が言われたら傷つくよ」サラサはぷうーとふくれて見せた。

それは自分が同じように言われたら認めてしまうという意味の反応か。

それともただの冗談か。

メローネより先に知り合っただのに友達として見られていなかったことへの不満か。

少なくともシロは短い付き合いではあるが彼女の大まかな性格については把握していた。

「もう、からかわないでよ。何か用があつて来たんじゃないの？」
シロの返答に、彼女はケロッとした表情を作つて答えた。

「いや。逃亡中たまたま通り掛かったらシロ君がいて、それで声かけたただから」

「逃亡中つてどうゆうことですか？」

メローネが抱いた疑問。

その理由はすぐに明らかになった。

廊下の向こうから、大声で彼女の名を呼ぶ者の存在があつたからだ。

「サラサー！ 水着の件で話がある！ 隠れてないで出てきてくれー！」

ドタドタと慌しく近づいてくる足音。
シロには声の主が誰かすぐにわかった。
語尾に必ずビックリマークが付くこの大音量は彼女の兄、サイダーしかない。

「お前が昨日買ってきた水着は危険すぎる！ 兄として見過ごしにはできない！」

学園指定の水着があるだろうがあれにしろー！」
姿の見えぬ妹に懸命に呼びかける兄。

「もう、うつざい兄貴。自分から言いふらしてるじゃん」
息を潜めながら悪態をつく妹。

自分の身を案じての事であるのは彼女自身がよく分かっているが、

理解することまでは出来ない。
サラサはまだ年頃の女の子なんだ。

「どんなの買ったか見たい？」

そう言つて意地悪そうな表情を浮かべると、ちょこんとスカートの裾を指でつまんでみせる。

青とモノクロの三重柄のチェック模様が持ち上げられ、そこから白い肌がチラリとのぞく。

その仕草が意味する事象はたった一つ。

すでに下に穿いている、ということに他ならない。

赤面するインドア派の二人を前に、ニシシと笑つて彼女は言った。

「今度のプール実習の時に見せるよ。じゃあねメローネさん、シロ君も」

スカートをつまんだ指の力を緩め、お次は人差し指と中指をくつつけての合図。

そのまま彼女は走つて行つてしまった。

フワリとスカートを翻して去った後、微かに残ったシトロラスの香りが夏の訪れを告げていた。

その様子を物陰から眺める二人組の影があることに、シロ達は気づいていなかった。

続く。

と見せかけてまだ終わりません！

入れ替わるようにメローネのバディがやってきた。

二つの綺麗な螺旋を描いた髪を揺らしながらモ力が現れたところで
今度こそ、

続く。

17・ピンクの魔法使い

17・

ドンドンドンとやかましくドアを叩く音でシロは目覚めた。

外はもう薄暗く、明かりが点いてないせいで部屋の中でも転んでしまいそう。

室内はほんのり蒸し暑く、かいた汗でシャツがまとわり付く。

傍らには一冊の分厚い本が無造作に横たわっている。

参考書「Five Colors」スライムでもわかるオークロツテ式魔法の基礎」をベッドで読み耽りながらいつの間にか眠りに落ちてしまっていたようだ。

「シロー、開けろー」

聞き慣れたバディの大きめな声。

外は風の勢力が増しておりガタガタと忙しく窓を揺らす。

両側を騒音で挟まれながら、足元をゆっくり確認して一步步ドアへ向かう。

ガチャンと鍵を開けると同時にノブが回り、ゆっくりと開くドアの影からフレッドがぬつと姿を現した。

「暗いなこの部屋。電気くらい点けろよ」

濡れた髪からポタポタと水を滴らせながらフレッドがぼやく。すると寝ぼけ眼をこすりながら言葉につまるシロを見て察する。

「なんだ寝てたのか」

「どうしたんですか？」シロ、寝起きの第一声。

「いやなに。台風対策に土のう詰めをしてたら部屋の鍵を落つことしたらしくてな。それでこっちの窓から飛び移ろうかと」

「スペアの鍵はないんですか？」

「そんなんもらってくんの面倒くせえだろ。とりあえず拭く物ないか？」

水滴で垂れる前髪を左の手で上げながら、もう片方の手でタオルをよこせとせがむ。

フレッドのこういう所がシロはたまに分からなくなる。

自分が同じ立場だったら先生に事情を話してスペアキーをもらってくる。

その方が安全で確実だから良いと思う。

これが普通なのか。

自分が間違っているのではないかと戸惑うこともしょっちゅうだ。

「メシ食ったか？ まだなら奢ってやるよ」

フレッドの粹な一言でシロの邪推と眠気は消え、目がパツチリと開いた。

「いいんですか」

「臨時収入が出たから特別だぞ」

そしてわずか一行の間に身支度を終え、並んで夕ご飯をかつ込んでいた。

この日は二人とも豪勢に定食を頼む。

ホカホカの白米、六等分に切り分けられた分厚いカツ、色とりどりの野菜におかわり無料のスープ。デザートにプリンもついている。

パクパクと軽快に口の中に放り込まれていく料理達に嬉々とした

顔で舌鼓を打つ。

バディの奢りであるというのもその笑顔の大きな要因に含まれているであろう。

「センパイおつかれー」

甲高い声が二人の間に割り込んでくると、それまでのルンルン気分を一気に吹き飛ばす顔が近づいていたことに気付いた。

昼間の二人組だ。

教室で読んでいた本を叩き落とし、去り際に暴言を吐いていったギヤル達と鉢合わせになった。

条件反射でうつむくシロ。

しかしそれを隣にいるフレッドに悟られたくないと思死に顔を持ち上げ笑みを浮かべてみせる。

「大変だったねセンパイ」とオレンジ色の髪の子が労いの言葉をかけてくる。

夏が訪れる前から日焼けしたかのように肌が黒く、その見た目とは裏腹に甘ったるくて愛らしい声。

フレッドの右肩にそっと触れるように近付いてそのまま細い指を使つてのマッサージに移行する。

「風邪引いてない？ このタオル使つてよ」と茶髪の方の女子が反対側から言い寄ってくる。

怯えるシロにお尻を向けて立ち、差し出したふわふわのタオルで乾き切っていないフレッドの髪を優しく拭き取る。

この子も濃度は落ちるものの肌が黒く、それでいて見た目相応にサバサバとした喋り方をしている。

一人の男子に群がる二人のギャル。

そこには完全に三人だけの空間が出来ていた。まるで存在していないかのように隣にいるシロを置き去りにして会話が弾んでいた。

料理を運ぶ手が止まる。

フレッドはしてやったりといった顔で隣の男子に話しかけた。

「どうだ。俺はこう見えて結構モテるんだぞ」

それは彼なりの優しさだったのか。

ただ単に自慢したかっただけなのか。

その真意はわからない。

答えを聞く前に、椅子の間に立つ彼女が一步詰め寄りその男子の姿を覆い隠してしまったのだから。

「なにそれ自虐ネタ？」

「モテないわけじゃないじゃん。男らしくてカッコイイもん」

もう一方の女子も畳み掛けてくる。

マッサージを続けていた手つきが徐々に艶かしく下がっていき、それに気を良くしたフレッドが目線を写す。

「わーお。俺も君達みたいな情熱的な女性はタイプだな。雨に打たれて冷え切ったこの心も体も暖めてほしいぜ」

「やーだセンパイのエッチ」

「でも私達、センパイの役に立てるなら一肌も二肌も脱いじゃうかも」。普段バディの子の面倒も見ても大変だろうし」

食堂に一際大きな黄色い歓声上がる。

シロはもう面を上げていられなかった。

必死にもたげていた頭が見る見るうちに力なくうなだれる。

そんなバディに一瞥をくれながら、フレッドが愚痴にも似た感想を大声で漏らす。

「だよなー。俺の後輩の使えなさといったら無いんだよなー。弱くて泣き虫で引つ込み思案でマジで扱いにくくてスゲー手が掛かるんだ。」

一瞬だけ見ると今でも女と見間違えるし、その度にガックリきてんだよ。紛らわしいったらないぜ」

「早く学校辞めちゃえばいいのにね。才能ないんだからさ」

「ねー。バディ組まされる側の気持ちにもなれって感じ。あーゆー奴をKYって言うんだよね」

「そーそー。おまけにあいつ『黒』じゃん。いるだけで迷惑な存在じゃん」

「周りがどんな風に思ってるか分かれよ！　って感じだよなー」

シロは動かない。

彼女達の口から出る罵詈雑言に言い返すことも出来ず、石像のように固まったまま座り込んでいる。

その横でメのスープをすするフレッド。

空いた茶碗をタンとテーブルに置き、立て掛けた刀を取り席を立つ。その表情にはいっぺんの曇りもない。

「全くもってその通りだな。『黒』の魔法使いなんて厄介極まりない」

「なんかここ暑くない？」顔をパタパタと手で仰ぐ仕草を見せる。

「ねー早く部屋いこー。ガマンできなくなってきたー」もう片方は甘えた声で誘惑してくる。

「そうだな」残ったプリンを容器ごと掴み取り、ズボンのポケットにぞんざいにしまい込む。

二人の少女をはべらせて「赤」の剣士は食堂を後にする。バディの姿はその目に映ってすらいない。

「その前にひとつ」

突如立ち止まり、おもむろに刀を構えるフレッド。

ゆつくりと鞘から妖刀を引き抜いた時、炎は出ていないものの刀身が凄まじい高温になっているのを感じた。

そのまま振り返ると二人の女子のぱっちりメイクされた瞳を交互に見つめる。

茶髪の彼女はより一層可愛らしい表情を作り、オレンジの方は突然のことにポツと顔を赤らめる。

それを見届けた後に彼は言った。

「その体に汚い菌が付いてないかチェックだ」

キンと刀を鞘に戻した瞬間。

彼の周囲に猛烈な突風が吹いた。

巻き上がる熱風。

閉め切られた食堂に吹き荒ぶ謎の風。

熱気を帯びた猛風は上昇気流を形成し、床から天井を目掛けて螺旋を描きながら舞い上がる。

室内にこだまする風切り音。

そして女子の悲鳴。

フレッドとシロの眼前には、うら若き乙女達のあられもないデルタ地帯に映える鮮やかなカラーの肥沃な大地が広がっていた。

続く。

学園の食堂を襲う突然の強風。

舞い上がる自然現象の悪戯に翻弄されるのは二名の女子生徒。

「ぎゃああゝ！」茶色の髪を振り乱しながら叫ぶ。

「いやあゝゝっ！」バタバタと音を立ててミニスカートがめくれ上がる。衆人環視の中で。

シロの瞳にはばつちりと映っていた。

そこにあつたのは桃源郷。

ひらひらレース付きの文字通り桜色に色付いた小高い丘。

その脇には紫紺のＴ字交差点が広がる。バックもフロントも。

それら二つのカラーが、こんがり焼けた肌とのコントラストで一際くつきりと映っていたのだ。

「はい。検査および熱風消毒完了、つと」

フレッドが挑発的な物言いで切り出す。

斜に構える彼を、顔を染めながらにらみつける二人の女子。

色づいた太腿を露出させながらもスカートを手で抑えながら、これまでよりも声のトーンを一つ下げて口を開く。

「今の風、アンタが起こしたのね」

「ええそうです。なんか文句があるのかピンク」

「下着の色で呼ぶな！」

先ほどまでの甘えた態度から一変し、激しく責め立ててくる二人に対しては彼は攻めの大勢を崩さない。

「俺の夜の相手を務めるなら、パンツくらいで恥ずかしがってちゃ耐えられないぜ」

得意げに言い放つフレッドに思わず引く二人。

彼女達だけではない。

食堂に居合わせたその他大勢の生徒達、そしてバディのシロも。

「くっそー覚えてやがれ」

「はい覚えておくよ。紫とピンク」

「だから色の名前で呼ぶなー！」

笑顔で見送るフレッドに、彼女達は捨て台詞を残して退散していった。

「なにやってるんですか先輩」

嵐の過ぎ去った食堂で、散らかった食器類を片付けながらシロがぼやく。

フレッドはその問いにモップを掛ける手を休め、自慢げに語る。

「気圧の変化さ。」

大気の一点を急激に熱することで気圧差を作り出し、それで風を巻き起こしたってわけだ」

「そういうことを聞いているんじゃないんです」人差し指をくるくる回す先輩に容赦なく物申す。

「興奮したか？」

同級生のスカートに隠された秘部を特等席で見せられる。

最高のショーである。

それが普段生意気でわがままし放題の奴であれば格別な味がすることだろう。

しかしシロはこの問いに素直に答えるような男ではない。

「そういう問題でもないですよ。なんてことするんですか」

「お前をいじめてた連中だぞ。なんで肩を持ったりするんだ、良い気味だろうが」

「そんなことしたらまたいじめられるからですよ」

シロの脳裏に堆積していた不安。

背後にまわり付く影に囚われて動けずにいた。

その闇を一瞬にして取り去ってしまったのが、フレッドのこの言葉であつた。

「お前そんなこと気にしてんの？」

仕返しを怖がつてたらいじめられっぱなしじゃねーか。どんなマゾだよ。遠慮なくやり返せばいいだろう」

「だって…」

そこまで言い掛けて、シロは言葉を詰まらせた。

言い返す言葉が見つからなかっただけではない。

どんなに上手な切り返しを思いついても、口論でこの男を言い負かすヴィジョンが思い浮かんで来なかったのだ。

そうやって黙りこくる時のシロは決まってうつむき、暗い顔になつてしまう。

四半年余りの期間を楽ししい時も苦しい時も一番近くで過ごしてきた彼にはそれが分かつている。

「好きな子をいじめちゃう心理ってあるだろ。きっとあの子達はお前にパンツ見て欲しかったんだよ」

「それはいくらなんでも極論すぎますよ」

だから一年先輩である自分がずっとシロの支えになってきた。時には厳しく当たりもしたが、巡り会わせたこの一年を面白おかしく過ごしていきかけたから。

「だから代わりに俺が見てやつただけのことだ」

「おもいつきり泣いてましたけど」

「物は考えようってことだよ。それにお前は一人じゃないだろ」

照れくさそうに耳をかく仕草で声が中断される。

そのセリフはフレッドがずっと言いたかったことであると同時に、本来フレッドの性格上声に出して言ったりなどしない言葉。

しかし二人きりのこの状況と、雨水の雑音が彼の背中を後押しした。「お前の周りには、たくさんの友達がいるじゃねーか。

サラサちゃんにメローネちゃん。ぽっちゃりのモカにアホのサイダ。俺だっている。困ったことがあれば仲間を頼れ」

その言葉を聞いてシロはあの日の出来事を思い出す。

はじめてこの学園にやってきた時に言われた言葉。

どうして魔法使いがバディを組むのか、その意味を思い出していた。

室内に沈黙が流れるのと対照的に、外は雨が一層激しさを増していく。

一方その頃。

食堂で不幸な事故に見舞われた先ほどの二人組は寮へと向かう道すがら、悪態をぶちまけていた。

その手には泥で薄汚れた鍵が握られている。

「くっそーあいつら絶対に許さねえ。バディにも召集かけてぶつぶしてやる」

「部屋の鍵を私達が持つてるとも知らずに。弱みを握って二度と逆らえないようにしてやる」

可愛い顔からは想像もできない毒を吐く二人。

男子寮へと続く渡り廊下に差し掛かるその時、対向してきた一人の

生徒とぶつかった。

「あぢえっ！」

触れた肩に電流が走る。

女であることも忘れたような声をあげ、指先まで駆け抜けるその衝撃に驚き倒れ込む。

痛覚を残す腕をさすりながら見上げる彼女を高い場所から見下ろすその人物が口を開いた。

「あら、ごめんあそばせ」

整ったその容姿と鋭く突き刺さるようなその声を確認し、無事だったほうの生徒が戦慄する。

目の前にいるのはこの学園で知らないものはいない。

並み居る一年生の中で一際美彩と才覚を放つ少女の名を。

「げっ！ こいつ雷のエルザ」

通り名を言われると、座り込んでいた方もおののく。

白い肌と光沢のある金髪が見る者を魅了する。

しかしてその指先から放たれる鋭い雷光はあまなく全ての者を恐怖に陥れる。

名を聞いただけですっかり怯えてしまった二名の魔法使いに、エルザは言葉の雷を落とした。

「ぶつかったのが私でよかったわね。

噂のシロ君の魔法だったら、あんたの腕なくなってたわよ」

その後の二人の姿は見るに堪えない。

腰を抜かしてしまった少女を、その片割れが担ぎわめきながら来た道を引き返していった。

廊下に一人残されたエルザはキュツとくちびるを噛み、そしてつぶ

やいた。

「あんなブスにやらせないよ。シロ君を倒すのはこの私なんだからね」

その顔は闘志に満ち溢れながらも、どこか清々しい決意を湛えていた。

そして舞台は暗転する。

雨雲が通り過ぎた地帯。

雨露を湛えた森の一角にその魔法使いの姿があった。

黄色のレインコートに身を包んだ声の主が優しい声で語り掛ける。

「レイ。出ておいで」

新たにもう一人、ガサガサと草の根を掻き分けて現れた。

木陰から出てきたのは間違いなくレイその人だった。

フレッド達と共に秘宝奪還の任に付き、そのまま行方知れずとなっていた黄色の魔法使い。

その彼女が元気そうな姿で声の主の前に現れた。

特徴的な長い髪は依然変わりなく彼女の体に蔭のように巻き付いていた。

「何か用ですか？」

「凄く良い子を見つけたの。『赤』よ。学園に連れて来てあげてね」

コートの彼女が指差す方角に小さな集落が見える。

民家が十数軒立ち並ぶだけののどかな山村を見下ろしながら、レイは彼女に尋ねる。

「フレッドはもういいんですか？」

答えは返ってこない。

それがいつものこと。

彼女の言葉は神様のお告げと同義である。

そう言わんばかりにレイは彼女の言葉にしたがって魔法使いになり、学園の優秀な生徒になり、フレッド達を森で置き去りにした。

これからも言われるがまさにターゲットとなった人物と接触し、『赤』の魔法使いとして学園に連れて行くだけだ。

「わかったよ、□□□」

続く。

18・ここR15（後書き）

第六章完結。

諸事情により無期限休載とします。

さらに一部の設定に変更があるので、続きはそれを全部書き直してからです。

追記：変更作業終わりました。

追記2：（改） このマークが出ている全てのお話を、12月に入ってから改稿しました。

19・ドキッ！ 女だらけの水着大回

19・

季節は夏！

サンサンと振り注ぐ灼熱の光が学園の生徒達のローブを一枚また一枚と脱がせていく。

大陸の南側に位置するオークロット地方は北方の豪雪地帯からも遠く、さらに盆地。

蒸し暑い日々が学園中から水分と集中力を奪っていく。

そして今なお活発に続く付近一帯の謎の地揺れが、生徒達のイライラを増長させていった。

だからこそ休日にみんなで遠出して海に行くという計画はすんなりと決まったのだ。

そして一行を乗せた馬車は軽快に坂道を下っていく。

海はもう目と鼻の先だ。

「僕、海に来るのひさしぶりです。いっぱい泳ぎたいですね」

長旅の疲れも忘れたかのように砂浜に立ち準備運動をはじめます。

それをいつものように鼻先であしらうのが彼のバディ、フレッド。

「お前には聞いてねーよ。俺が興味あるのは女の子だけだ」

彼の視線の先にはたくさんの女の子たちがいた。

海に来たのは総勢八名の見知った顔ばかり。

第二―三章で一緒に戦ったサイダー＆サラサの「青」の魔法使い兄

妹。

第五章で知り合ったモカとメローネのバディ。

そしてもう一組。

馬車を降りた後、すたすたと木陰に逃げ込んでじっとしているバディがいる。

フレッドは第一章で知り合ったその子の元へ歩み寄る。

いつものキレイな金髪を、今日は後ろで結んでいるのはエルザだ。入学初日からシロと一悶着を起こした彼女はフレッドに気付くと上目遣いで話しかけてきた。

「私、海は行くのも見るのも初めてなんだよね。ていうか水につかること自体ほとんどないし」

「それじゃ風呂も入らないの？」

「うん。ほとんどシャワーだけ」

「黄色の魔法使いだから？」

「うん、黄色だから」

黄色だから、なんだというのか。

遠くで話し声だけ聞こえていたシロがようやく追いついて聞き返した。

「黄色だからなんなんですか？」

「お、話に加わってきた」

エルザが新鮮な反応を見せた。

シロが女の子の自分に話しかけてくるのがそれほどまでに意外だったのだ。

「エルザちゃん泳げないんだってさ」

「泳げたくないよ。泳いだことがないだけ」

必死に訂正するエルザ。

一年生二人を見比べながらフレッドが提案する。

「そうだ。泳ぎの得意な女男君にマンツーマンで教わるのもいいんじゃないか？ ま、ムリだろうがな」

手を口に当てながら笑いをこらえるポーズで挑発。

これまた入学初日の話を振り返る。

バディを組んだばかりの頃、フレッドはシロのことを見た目で女の子だと思い込み、下着が入った箱をぶちまけたことがあった。

その時に性別とともに判明したのが、シロは泳ぎが得意であるということだ。

これまでずっと忘れ去られていたこの設定が今回活かされようとしている。

だがしかし。

エルザという人物にあまり良い思い出がないシロは困った反応を見せる。

そしてエルザ本人もどうでもいいといった様子で座り込んでしまった。

進行上の都合触れてはいないが、入学式以降もエルザとは何度もニアミスしている。

その度に再戦を挑まれているがシロは逃げ惑うばかりだ。

今日はそんな二人の関係をどうにか修復できたらという淡い期待も込めて連れて来ている。

「バトルなら受けるけど」

髪をいじりながらぼそっとつぶやくエルザ。

二人の間に割って入りながらフレッドがどうにかなだめる。

「今回はバトル無しだ。楽しいこうぜ」
「そうじゃぞ。海はなにかと危ないからな」

男らしいガサガサ声が隣から聞こえてきた。

そこには砂地に十枚ほどの葉っぱを並べて何事かをつぶやいている少女がいる。

体格は隣りに座っているエルザと変わらない。

そして今まで姿を見せなかった彼女こそが、何を隠そうエルザのバディ。

「占い師アイリーフ。いろんな通り名を付けられているが、一言でいえば変人だな」

変人。

その呼び方にあっさりと納得ができてしまうような身なりを彼女はしていた。

五、六箇所できちやくちやに結つてあるボサボサの髪。丸い縁の大きいメガネ。

衣類も至る所に引っ掛けて破れたような跡があり、ジーンズのダメージも深刻だ。

「周りの言うことなんて関係ねえ」とでも言わんばかり。

今も周囲の情報をシャットアウトして、砂地に並べられた葉っぱ達を食い入るような目つきで見つめている。

そんな感じの彼女のことを、今日が初顔合わせとなるシロにとりあえず紹介だけ済ませる。

やがて意を決したように彼女はそこから一枚の葉っぱを取り胸元に手繰り寄せ、大きく息を吐いた。

「なにをしてるんですか？」と恐る恐る尋ねてみる。

「占い」

「へー、どんな結果が出ましたか？」

シロの問い掛けに答えるように、手の中にあるその葉をめくって裏側を見るアイリーフ。

そして告げられる。

「今日はおなががいっぱいになるでしょう」

その場に沈黙が流れた。

パチクリとまばたきして状況を整理するシロの肩をポンと叩いてフレッドが言う。

「な、変だろ」

そうこうしているうちに。

水着に着替えた者から思い思いに海での遊びをはじめ。

泳いだり潜ったり、ボール遊びをはじめたり。

水着姿の少女達を食い入るように眺めるフレッドと、それを阻止するサイダーがいたり。

「そうだ！ いいこと考え付いちゃったぜ」

提案がある。

そう言って全員を一旦集めたフレッドが言う。

「せっかくの海だしおもいきり楽しんでほしいと思う。

だが海つてのは普段馴染みがなくて面白い分、危険も多い場所だ。そこでだ。

楽しむという本来の目的を達成する良い機会作りってことで、バデイの交換でもして遊ぼうぜ。

その代わり通常のバディと同様、常に助け合いの精神は忘れないこと。それでいいよな」

「ふざけんな！ それお前が得するだけだろうが！」

フレッドの提案に真っ先に異議を申し立てたのはサラサの兄、サイダー。

彼はとにかく妹のことが大好きで、今回の遠出もほとんど妹のサラサのお守で付いてきた口だ。

そんな彼の、可愛い妹の愛らしい水着姿を見て欲情しない男はいないという心配がシスコン魂（略してシス魂）に火をつけてしまったのだ！

さらに『バディ』の交換という点に潜む罠もサイダーは見抜いていた。

一年生は約一名を除いてみんな女子。

そのたった一人の男子と普段組んでいる女好きの彼はどう転んでも女子が当たるという寸法だ。

3割バターで妹とバディになってしまふ危険性をこのシスコンは見過ごせなかったのだ。

だが妹は乗り気だった。

魔法使いにちなんだ四色のコントラストがまぶしい水着を指で直しながら近づいてきた。

「おもしろそうだしいいじゃん」

「サラサ！ これはお前のためを思って言ってるんだぞ！」

「てゆーか海に来てまで兄貴と一緒になんて絶対イヤだし」

心配もむなしくバツサリ切り捨てられる兄。

道中も馬車の中でやれ水着が派手だとか肌を露出しすぎだとか小言を言われ続けてきたサラサの我慢もピークにきていたようだ。

そして他の女性陣も概ね賛同してくれた。

反対したのはむしろ男性陣ばかり。

「一緒にやらないんですか？」とシロまで残念そうな顔をする。

そんな後輩を彼は冷たく一蹴する。

「なんで水着になってまでお前と引つ付かなきゃならねえんだよ」

途端に不安そうな表情を浮かべるシロ。

そんな後輩を諭すように耳打ちした。

「安心しろ。これはあくまでバディの交換だ。一年生同士で組むことはない」

フレッドはちゃんと後輩のことも考えていた。

バディということは違う学年同士の組み合わせ、即ち天敵エルザと組むことは無い。

それに彼と接してきたこの四ヶ月間が、内気で人見知りの激しかったシロを少しでも変えたことは間違いない。

女の子との接し方も、彼の隣りで見てきて分かり始めてきていた。

意見がまとまった所でフレッドは砂浜に落ちている適当な石を四つ拾い上げる。

それぞれ「赤」「青」「緑」「黄」の四色を塗り、それぞれの色を持つ二年生に見立て、袋に入れたその石を一年生達が順番に選んでいく。

まずメローネが青の石を引いてサイダーと即興のバディを組んだ。

次のサラサは黄色の石、つまりモカと。

「赤」のフレッドと組むことになったのはエルザ。

そしてシロの今日の相手は「緑」の占い師アイリーフに決定した。

続く。

20・好きな女子はいるか

20・

「おぬしは好きな女子はいるのか？」

「なんですか藪から棒に」

シロはこの海限定でバディを組むことになったアイリーフと一緒にいる。

とはいえ彼らの性格上特に会話があるわけでもなく、それぞれが付かず離れずの位置で思い思いのことをしていただけだ。

周りはすぐに打ち解けあつて仲良さそうに遊んでいるのに。

普段彼と話すことの多い「緑」の少女が、即興で組んだ「青」の二年生男子と仲良く手をつないでいるのが見えた。

少し胸のあたりがチクチクする感じ。

ちょうどその時に、背後から彼女の声が聞こえてきたのだ。

「せっかく服を脱いだるんだ。心の服も脱ぎさつて話をしたいじゃないか。それともわしの脱ぎ方では不満か？」

「いえいえいえもう十分です」

大げさ過ぎるほどのジェスチャーを交えてシロが反応する。

映像をお見せできないのが残念だが、せめて言葉の描写は頑張ってみようと思う。

ぶつちやけ、彼女は水着をつけていない。

この書き方では誤解が生まれるが、普通の水着をアイリーフは持っていないのと言う。

彼女が持ってきていたのは二枚の貝殻とロングサイズのワカメ。

しかしそれでは理性を保てない男が出てしまったため、やむなくシロが持ってきていたもう一枚の水着とＴシャツを貸してあげる形になった。

ちなみに。

なぜ二枚も水着を持っていたかというと膝丈までのバミューダともつこり競泳パンツ、どっちを履くか直前まで悩んでいたためらしい。

「いませんよ」

好きな子がいるかという質問に、シロは落ち着き払って答えた。

これがシロの悪い癖だ。

たといなくても、誰でもいいから女の子の名前を挙げればいいのに正直に答えてしまう。

これが女の子との会話が長続きしない理由であり、シロの女嫌いを育ててしまった原因だ。

アイリーフは少し考えた後に質問を変えてきた。

「年頃の男子はみんな好きな女子の十人や二十人いるものだと思うとったのに、草食系か。」

ならばここに来てる女子の中で一番可愛い子は誰じゃ」

「か、可愛い子……ですか？」

この質問に少し戸惑うシロ。

見事に釘を刺された。

「好きな子じゃなくて可愛いと思う子じゃ。今度は『いない』って答えはなしじゃぞ」

「えっとそれは」

辺りを見渡しながら困った顔をするシロ。

「照れるようなことじゃないじゃろ。遠慮せず言ってみろ」

「・・・ネさん」ぼそつと小声で話すシロ。

「なんじゃって？」アイリーフは名前を聞き取れない。

「・ローネさんです」

「聞こえんぞ、誰じゃ」もじもじと話すシロを急かす。

「メローネさんです」

「もっと大きな声で」

「メローネさんが可愛いです」

「もう一回もう一回」

「いやもう確実に聞こえてるでしょ」

いつの間にか接近していた二人が距離をとる。

ちよつと大声を出してしまい、海の中でうずくまって火照った体を冷やす。

「そうか『緑』のあの子か。ならば同じ『緑』のわしにも可能性は残されとるのかな」

前髪をいじりながらアイリーフがそんなことを言うもんだからシロはまたしても戸惑ってしまう。

「えっ？」

「冗談じゃから恥ずかしがるな。『まじっすかーじゃあ付き合ってます？』と返せるようになれば会話が弾むぞ」とアドバイス。

シロはわかったようなわかってないような曖昧な返事だけ残し、それからまた会話が途切れてしまった。

海辺は静かだ。

ザザザー、ザザザーと引いては寄せる波の音が心地良い。

遠くで聞きなれた先輩の声が聞こえる。

ゴム製のボートを引いて海に行く彼の元に、この海限定でバディを組むエルザらしき子が近づいていく。

二人はなにやら口論をしている。

フレッドが手元にあるゴムボートを叩きながらなにかを説得している様子だが、エルザの方は何度も首を横に振るばかり。

おそらくフレッドはエルザをボートに乗せて海をエスコートしたいのだろう。

しかし彼の思惑とは裏腹に彼女のほうは乗り気じゃない。

やがてふいつときびすを返し、陸へ上がっていつてしまう。

残された彼は急にこちらを向いてやれやれといった仕草を見せ、ゴムボートを担いで彼女の後を追う。

「ずまんがもう一つだけ質問させてくれ」

人差し指を立ててアイリーフが迫ってきた。

びっくりして仰け反り、そのまま水しぶきをあげて尻餅をつくシロ。頭から海水をかぶった彼のことなどお構いなしに彼女は質問を投げかけてくる。

「エルザのことをどう思っどる？ わしの知らん所で問題を起こしたと聞いたが」

問題というのは入学式 バディが決定した日 の翌日のあの事件。

エルザがバディの交換を要求に近づいてきて、フレッドが勝手に承認して魔法バトルが始まってしまった一件のことだ。

当時まったく魔法が使えなかったシロは、そのバトルにおいてエルザが放つ電撃魔法に痛めつけられ極度に雷を。

しいては当の本人であるエルザを含む黄色の魔法使い達全般を恐れるようになってしまった。

だけど。

「仲良くしたいという気持ちはあります。でもエルザさんはやっぱりおっかなくて苦手です。触るとビリビリするし」

シロはあれから成長した。

いまだ不安定ながらも魔法をある程度まで使えるようになっただけでなく、老若男女誰とでも変わらずに接する先輩と行動を共にしてきたことで内向的な性格がいくぶん改善されてきている。

女の子と話す時にはまだ緊張が止まらないのだが、話しかけることすらできなかった四ヶ月前に比べたら目覚ましいほどの変化だ。

それでもまだエルザは怖い。

その気持ちを日常、エルザとバディを組む彼女に偽ることなく話してみせた。

すると意外な返事が返ってきた。

「エルザも同じことをわしに相談してきたことがあったぞ。

仲直りをしたい男の子がいるとな。だけどどうしても上手いかないと真剣に悩んどったな」

そしてアイリーフの口から語られる。

エルザという少女の心の内を。

続く。

21 ダブルケミストリー

21 .

一日限りのバディ交換。

普段慣れ親しむ機会の無かった者同士が交流を深めるこの措置は予想以上に好感触だった。

早々に海から上がったサラサは、パラソルの下でくつろいでいたモカの脇に座り込む。

純白でいて大胆なハイレッグを着こなすモカはまさに落ち着きのある女性という雰囲気醸し出している。

それとは対照的に明るく行動的な原色系をまとうサラサの組み合わせはなかなか絵になっている。

最初は先輩の経験談を聞いているだけだったがちよくちよく口を挟みつつ、次第に熱く語り合う。

仲睦まじく語らうその姿はまるで本当の姉妹のよう。

その会話の内容を聞き取る事はかなわなかったが、二人とも次第に顔が真っ赤になっていった。

両腕に浮き袋。そして大きな浮き輪を装備したメローネを、サイダーが魔法を使って海水を操作する。

空や海面に様々なアートを描き、海水ごと彼女を持ち上げて楽しませる。

はじめは不安げな顔を浮かべていた彼女も次第に笑顔がこぼれるよ

うになる。

無邪気にはしゃぎ合うこの二人も、今回のシャッフルがなかったらきつと知り合う機会はなかったであろう。

普段のバディとはまるで正反対なこの取り合わせに、二人とも十分満足しているようだ。

上述の二組とは違い、フレッドとエルザは日頃から交流が続いている。

お互いのバディよりもずっとバディらしく在ると言っている。

今日に限りエルザが乗り気じゃない理由。

それは追々判明することなので、今は話を続けよう。

フレッドの本来のバディ、シロ。

彼は普段からシロを突き放す言動や行動が目立つが本心から彼を邪魔者だと思っているわけではない。

そうすることが彼なりのコミュニケーションであり、いろんな意味で消極的なシロの性格を変えてやるのに最適な手段だからそうしているだけ。

だがエルザのバディはそうではない。

アイリーフは相棒はおるか、自分自身にすら興味がない。だから身だしなみも構わずに占いにはかり傾倒している。

少なくともエルザはアイリーフをそういう目で見ておりもう諦めている。

しかし

「あの子はとっても不器用なんじゃ」

波に身を任せながらアイリーフがつぶやく。

仰向けに漂う彼女の髪も、身にまとうＴシャツもすぐに水分を吸い取って肌に密着する。

隣りで耳を貸してくれている男の子の姿が眼下に見える。

シロの姿がある少年とタブって見えたその時、彼女は不意に昔のことを思い出していた。

不器用なのは自分も同じだ。

アイリーフが占う未来はよく当たりもすればよく外れることもあるとても不確定なものだった。

なぜ自分の占いは当たりと外れがあるのかずっと謎のままだった。

その理由に気付いたのは、彼女が魔法学園に入学する二年余り前のことだ。

「日常生活において黄色の魔法使いは浴槽につかる習慣がない。体中を流れる電気が水を通して所構わず流れていってしまうからじゃ」

その言葉を聞いてシロは、海に来てエルザが最初に話していたことを思い出していた。

普段当たり前のように利用している学園の大浴場。

ところがエルザを含む多くの黄色の魔法使いたちはその浴槽に入ることなくシャワーで済ませることが一般的という話。

自身は電気のコントロールができるし電気に対する抵抗も備わっているから、自分が起こした電気で感電したりしない。

しかし周りにいる他の者達までがそうではない。

魔法学園が設立した当時は『風呂の中で交流を深め、生活の中で魔法を克服する』という願いを込めて共同浴場が作られた。

しかし時代の流れとともに物の考え方は変わり、大きな事故が起きる前に全寮室にシャワールームを設置すべきではないかという意見

が出てきている。

学園のお風呂の形態が今後どう移り変わっていくにせよ、現在は黄色の魔法使いと好き好んで一緒に風呂に入る者はいない。

「黄色の魔法使いが孤立しやすい理由の一つじゃ。

雷系統は他者を傷つけやすく、土系統は自分の魔法だけで何でもやれてしまう応用力があるからの」

エルザのほかにあと二人の「黄」色をシロは知っている。

モカとレイのことだ。

その二人も彼女が言うとおり、好む好まざるに関わらず一人でいることが多い者達。

今日一緒に海に来ているモカは自分に敵対心を持つ者を極端に跳ね除ける性格の持ち主。

そして森で行方が分からなくなっている三年生のレイも、学園内で並ぶ者のいない秀才。

エルザもいずれそうになってしまう。

アイリーフは彼女の行く末を案じていた。

「エルザのこと、嫌いにならないでやっておくれ」

切実な想いを込めたアイリーフの願いをシロは真剣な眼差しで聞いていた。

その瞳が再びあの日の少年の視線と重なった。

アイリーフが見つけた、自分の占いが当たったり外れたりする原因。それは占いを行なう自分自身の心の弱さにあった。

強い心を持って占ってこそ真実が見えてくる。

弱い心のまま未来を占っていては本当の道は見えてはこない。

そして彼女の心の弱さがあの日、あの少年を見殺しにする未来を招いた。

「キヤーー！」

潮騒を切り裂く女性の声。

切り立った崖を挟んだ向こう側から聞こえるその声を彼女は一発で聞き当てた。

「エルザの声じゃ」

その頃、崖の反対側で今まさにエルザが窮地に立たされていた。

追いかけてくるフレッドを振り切ってやってきた人気の無い浜辺で突如現れた巨大生物。

そして彼女の足に絡みつく粘着力のある黒い触手。

魔法すら唱えられない極限状態の中に、彼女は一人追い込まれていた。

続く。

21 ダブルケミストリー（後書き）

この章は4部立てで、次のお話はちょっとながーいよ。

22・あついじゃないカ

22・

崖と森に囲まれた人気の無い浜辺に追い詰められたエルザ。

海辺から顔を覗かせているのは黒い巨大なタコ。

かつて森で遭遇したゴーレムに匹敵するほどの巨躯を持つタコは傲慢の二本の足でフレッドを締め上げる。

全身をギリギリと圧迫されながらも懸命に呼びかけるフレッド。

「エルザちゃん無事か」

最初に襲われたのはエルザの方だった。

触手に足を捕られて海に引きずり込まれる寸前のところで、間一髪追いついたフレッドが身を呈して身代わりになりこの状況が作られた。

助けられたエルザはフレッドを見上げながらその声に答えた。

「私は平気」

「それはよかった。魔法でこいつをなんとかしてくれ」

「だめよ。ここで使ったらフレッド君が感電しちゃう」

その通り。

先程まで海につかっていたため今もフレッドの体は塩水にまみれている。

服などの防具すら一切まとっていないこの状態で、この巨大生物を退けるほどの電撃を流すとなればただで済むはずが無い。

バディを助けるための武器がありながら助けられない。

フレッドとエルザは未だかつて無い窮地に立たされていた。

「まいったな。剣は浜辺に置いてきたぞ」

人外の力で締め付けてくる触手に耐えながら思索する。
やがて意を決したように言い放つ。

「エルザちゃんが無事でよかった。急いでみんなを呼んで来てくれ」
「でも、もしその間にタコが海に潜ったら」

「これはバディとしての命令だ。自分の魔法だけで助けようなんて
思わなくていい」

締め上げる力がより一層強くなる。

意識が朦朧とし始めてきたそのギリギリの所でフレッドは踏ん張り、
エルザに呼び掛け続ける。

その時、事態是最悪の方向へとシフトしていく。
二本の足でフレッドを握り締めながら、巨大タコが海へ向かって進
み始めたのだ。

もはや一刻の猶予も無い。

「先輩！」

いよいよ海に引きずり込まれようかというまさにその瞬間、シロ
が浜辺へ駆けつけた。

そして巨大な海洋生物の腕に捕らえられた彼の姿を確認するやその
足を速める。

ピンチの時に現れた後輩の腕には見覚えのある長物が抱えられてい
る。

「シロ、俺の剣を持って来い」
「もう持ってきてます」

抱えていた刀を高々と持ち上げる。
しかしフレッドは触手によって両腕を封じられていて身動きが取れ
ない。

こうなると自分の杖を持ってこなかったシロはある一つの賭けに出る他ない。

それは自分自身がフレッドの愛用する刀を手にして戦うということ。息を整えつつ右手で柄を握り締め、左手が力強く鞘を掴んだその瞬間。

「やめろシロ！ その刀を使うな」

フレッドが叫んだ。

しかし時既に遅し。

シロが握りし妖刀は鞘から解き放たれ、刀身から勢いよく赤色の炎が噴き上がる。

次の瞬間、この場に居合わせた三名の魔法使い達は信じられない光景を目の当たりにする。

なんと発せされた炎がその火力を増しながら徐々に刀を伝って手元の方へと燃え広がってゆく。

炎はやがて刀の鏢、握られた柄をも乗り越えてシロの右手に燃え移る。

そしてあるうことかその炎は吸い込まれるようにシロの体内に入っていくではないか。

この一連の展開に一番驚いたのが言うまでも無く刀を握っていたシロ自身だ。

炎が腕の中から侵入し、内部から全てを焼き尽くさんとする破壊的な衝動が全身を駆け巡る。

ひどく取り乱した声を上げて思わず刀を放り投げ浜辺に倒れ込んでしまった。

そしてその様子を逃さず見ていた二人の魔法使い。

あまりにショッキングな事態の有様に動揺を隠し切れないエルザ。とそこへ、刀に向けた注意を再びこの大ダコへと呼び戻す一喝が飛んできた。

「エルザちゃん！ その刀を投げてこのタコに刺せ。そこを狙うんだ」

依然として触手に締め上げられながらもこの男は冷静さを欠いてはいなかった。

そして頭の切れる彼女もまた、すぐにフレッドの狙いを見抜いた。しかし砂浜に投げ捨てられた妖刀を前にして伸ばした右腕が強張る。目の前に転がっているのはシロを業火に包んだ妖刀。

持ち主でもない自分が触れたら、シロと同じ末路を辿ることになるかもしれない。

その疑念が脳裏をよぎる。

「でも、大丈夫なの？ この刀…」

不安な気持ちを声に出すエルザ。

「今の炎は…」

口出ししてきたフレッドが言葉に詰まる。

それは巨大なタコの強靱な腕に締め付けられたことによるダメージのようにも見える。

しかしそのあとに続く彼の口ぶりを見るに、実際は『本当のところを隠すための嘘を考えている間を作った』。

そんな風に彼女の目には映った。

「…今の炎は、いたずら防止用に仕掛けておいた罠だ。脅かすだけの炎で火傷はしない。

シロが剣を抜いたことでトラップが作動した。それだけだ。もう触っても大丈夫だ」

果たしてフレッドの言っていることは嘘か本当か。
とにかく今は彼の言葉を信じるしかない。
それくらい状況は切羽詰っている。

意を決して恐怖心を抑え込み、地面に横たわる刀を拾い上げるエルザ。

そのまま心に溜まった雑念ごとぶつけるかのように力強くその刀を
タコ目掛けて投げ飛ばす。

妖刀はぐるぐると縦に回転しながら放物線を描く。

そして投げられた刀はグサリと見事に大ダコの触手をかいくぐり胴
体に突き刺さった。

「そこだ。その刀に目掛けてぶちかませ！」

フレッドが合図を出す頃に、エルザはすでに右手に力を溜め込んでいた。

親指にはめられた指輪が光り輝きそこから膨大な魔力が放出される。
そして力強い掛け声とともに、彼女の右手からバチツと眩しい一筋
の電撃が放たれた。

サンダーボルト
「招雷！」

刀を投げると言われたあの瞬間に、エルザは雷に撃たれたかのよ
うに全てを理解した。

普通に電撃を浴びせたのではタコの体を伝わってフレッドにまで電
撃の効果が及ぶ。

しかし対象に棒状の物を突き立て、そこにのみ電気を流せば…

その思惑は見事に功を奏した。

フレッドの妖刀が避雷針となってエルザの放つ電撃を一手に請け負

う。

これならば味方への被害を最小限に留め且つ敵に大きなダメージを与えることが出来る。

しかし彼らの作戦には大きな誤算が含まれていた。

いくら電気を通さない措置を講じたといえど、一步間違えば感電に遭う危険な綱渡り。

直撃を受ければ肉体や精神に重い障害が残ったり、最悪の場合死に至ることもある。

電気という非常に殺傷力の高い魔法を扱いその特性をよく知る彼女だからこそ、フレッドを気遣う余り無意識の中で魔力を抑えてしまっていたのだ。

そしてその行動が、この大ダコを一発で仕留め損なってしまったことでさらに逆上させてしまうという最悪の結果を生む事になった。怒りに身を任せのた打ち回る八本のタコ足。

水面を何度も叩き付け、夏の空に跳ね上がった水滴がバシャバシャと降り注ぐ。

ついにフレッドを捕まえて離さない触手が振り上げられ、海面に叩き付けられようとせんまさにその時。

突如水面から出現した鋭利な物質がタコの足を切り裂いた。

切り落とされた触手は途端に力を失い、動きを制限されていたフレッドは脱出に成功する。

ようやく自分の足で着地できた彼の目に映ったのは、水面に突き出した一本の鋭い植物だった。

これが彼を縛り付けていたタコの足を切断してくれたのだ。

正体不明の謎の攻撃によって足を奪われた大ダコは逃げるように沖へと引き返していった。

浜辺に残されたフレッドとエルザ、そして倒れていたシロがむくりと目を覚ます頃。

騒ぎを聞きつけた他の四人の魔法使いたちも駆けつけてきた。

フレッドを助け、タコを退けた不気味な一本の枝。

それが唯一この場に来ていない魔法使いアイリーフの仕業によるものであることをフレッドとエルザは知っていた。

ここで説明しよう。

アイリーフの持つ「緑」色は万能の属性。

「青」に対しては植物と水の関係。

「黄」色に対しては大樹と大地の關係に置き換えると分かり易い。

植物の根は水を吸収し、太く育った樹は大地を切り裂いて育つのだ。

さらに！

「赤」に対しては燃やされることで克服される關係にあるが、それすらも無効とするだけの性質が緑の属性には含まれている。

それは

「最高だぜ姐さん」

声と足音が近づいてくる。

崖の上で座り込んでいるアイリーフの元へまず一番にフレッドが駆け寄る。

他のみんなもぞろぞろと後に続いてやってきた。

「サンキュー助かったぜ。このお礼はデート一回ってことでいいかぬあつ！？」

手を差し伸べた「赤」のフレッドが、後ろから近づいてきた何者かに突き飛ばされる。

横から割り込んできたのは「青」の一年生サラサ。

表情を変えずに座り込むアイリーフとは対照的にその表情はキラキラまぶしく輝いている。

「かつこいー！ あんな遠い所までどうやって攻撃したの！？」

期待に胸を膨らませる彼女を喜ばせようとアイリーフは傍らの木の枝を拾い魔法を使つて見せた。

「集中すればもつと長く伸ばせるぞ」

そいつって足元に散らばる大量の木の葉をヒラヒラと浮かび上げらせる。

スゴイスゴイと手を叩いてはしゃぐサラサ。

話がぶつ切りになつてしまつたが、「赤」の魔法使いをも退ける要素がこれだ。

それは相性の良い「青」の魔法使いを味方につけること。

もうおわかりだろうか。

水分を含んだ木材は燃やせない、ということだ。

「それにしても沖合いに住む大王タコがどうしてこんな浅瀬に？」と疑問を投げかけるシロ。

「おそらく例の地震が原因じゃろうな」とアイリーフが話す。

「地震？」フレッドがチラリと横目に反応する。

「何が言いたいんですの」それを受けて訝しい表情をつくるモカ。そんな二人のやり取りを華麗にスルーしてアイリーフの話は続けられる。

「地震の発生源は圧倒的に海上が多いからの。海の中にいると揺れがひどいから浜辺で休んでいたんじゃないか？」

「そんな船乗りみたいな感覚なの？」と首をかしげるサラサ。

「っーか！ 捕まえたらさっさと海に潜ればよかったのにあのノ口

マタコ！」とサイダーが憤る。

「あのタコは空気の読めるタコだったんだよ、ケーワイダーと違ってな」とフレッドが返す。

「あのタコさん、タコに見えるけど実はイカだよ」と本の虫メローネがぼつりと語る。

この衝撃の真実には一同全員が驚きの声を出さずにはいられなかった。

タコ、もとい一連のイカ騒動が収束に向かう頃。

アイリーフの元へ駆け寄るシロはまず頭を下げた。

「ごめんなさいアイリーフさん」

「なんじやなんじや？」と唐突な謝罪に困惑するアイリーフ。

「さっきの質問、嘘をつきました」。

本当は一番好きな子がメローネさんで、一番可愛いと思うのは違う人なんです」

二人はこの海限定でバディを組んでいる。

エルザの叫び声が聞こえてくるまでの間に、アイリーフがシロに好きな女の子と可愛いと思う女の子を尋ねていたことを思い出してほしい。

あの時は照れ隠しのつもりで前者は『いない』、後者を『メローネ』と嘘の回答をしてしまった。

そのことを訂正しに来た彼の目を見て、彼女は笑顔でもって許してあげた。

「そうか。すまん」

「こちらこそ、フレッド先輩のことありがとうございました」

ペコリと一礼するとシロはきびすを返してまた走り出す。

小さく手を振って見届けるアイリーフ。

走る彼の後ろ姿が三度あの日の少年のものと重なった。

そういえばあの少年はいつだって前を向いていて、座り込んでばかりいる自分は顔を見ることすら出来なかったな。

そのことを思い出した彼女は改めて認識する。

強い心を持って占ってこそ本当の真実が見えてくるのだと。

背中を追っていた彼が向かうその先には、アイリーフの本当のバデイの姿があった。

「あの、エエエルザさん」

まだ緊張は解けない。

それでもシロはこの海での出来事を通じて前を向くきっかけをもらった。

そしてターゲットは今自分の目の前にいる。

後ろには勇気も力も何もかもを与えてくれた先輩達がいる。

もう逃げることはできないんだ。

エルザは顔を背けつつも先手を打った。

「か、勘違いしないでよね。私一人なら余裕だったけどフレッド君と一緒にだったから魔法を使えなかっただけなんだから」

「うん、ありがとう。先輩を助けてくれて」

すかさず右手を差し出すシロ。

エルザの伸ばした手が一瞬ためられる。

しかしすぐにまた接近し、まず人差し指が最初に触れる。

それで何もないことを確認した後、手に手をつなぐことに成功した。

そこから彼女はつないだ手から目線を持ち上げる。

そして対面する彼の目をまっすぐに見て、色白の顔を赤く染め上げ

ながら大きな声で言い放った。

「こっちこそごめん！」

言いたくても言えなかった四ヶ月分のごめんの気持ち。

さつきよりも強い力でぎゅっと手を握り返して送りつけた。

それぞれの一年生の後ろで見ていた二人も、祝福するように笑顔を向けていた。

「さあ。仲直りも済んだことだし、みんなで食事にしようぜ」

フレッドの声を聞き振り向くと、そこには着々と食事の準備を進めるみんなの姿があった。

見渡すと浜辺に打ち上げられた巨大イカの一本足。

そして先程のイカの大暴れによって海面に浮かび上がってきた大量の魚市場。

海を訪れた当初にアイリーフが占った運勢。

『今日はおなががいっぱいになるでしょう』

奇しくもその未来は的中し、その後もとことん海を堪能した魔法使い一向。

紅く染まった夕日が西の海へと沈んでいく頃、

帰りの馬車に揺られながら皆はしゃぎ疲れて眠っている。

しかし一人だけ、ぱっちり目が冴えている男がいた。

「フレッド先輩、起きてます？」

シロの呼び掛けに誰も反応しない。

当のフレッドはグーグーといびきをかいている。

美少女揃いの面々の寝顔を拝む千載一遇のチャンスを逃していることに気付かずぐっすりだ。

夕日に照らされし右手を眺めながら言いよの無い不安感が彼の周りを包んでいる。

右手を通して体内に侵入してきたあの炎はいったい何だったのか。左手の指で触れてみると、その手は冷たく震えていた。

続く。

22・あついじやないカ（後書き）

八人も登場させたもんだから、極力四人にライトを当てたけど長くなってしまいました。

楽しんでいただけていたら幸いです。

予告。

フレッドとシロ、バディ崩壊の危機が訪れます。

登場人物紹介など

【登場人物】

一年生：基本的な授業、二年生とバディを組む

・シロ 本名 Shirō Lambadadia 「黒」
女性が苦手な草食系男子、だが女の子にしか見えないこの物語の主人公。

155cm、泳ぐのが得意。

・エルザ 本名 Elsa Rudgoal 「黄」
雷を撃つおてんば、素質あり。

163cm、巨乳！

・サラサ 本名 Sarasaa Ermasea 「青」
清純派活発系美少女、兄貴と戦いが大嫌い。

156cm、聴力が凄い！

・メローネ 本名 Melone Highpriester 「緑」
控えめな文学少女、魔法の实力は低いが愛すべきがんばり屋さん。

146cm、ツインテールッ！

二年生：より高度な授業、一年生とバディを組む

・フレッド 本名 Fled Blocks 「赤」
魔法剣士。将来の夢はハーレム教師。火を吐く妖刀「閻魔えんまのひとふり一振」を

所持。

174cm、ペン回しが得意。

・サイダー 本名 Cider「Ermasea」「青」

ハイテンションシスコン。妹のサラサが好きでしょうがない。

178cm、！これ付けずに喋るとジンマシンが出る。

・モカ 本名 Mocha「Artina」「黄」

ベテランで温和。お嬢様言葉をたしなみ、バディに御姉様と呼ばせている。

154cm、太りやすい体質に悩む日々。

・アイリーフ 本名 Eyeleaf「Lare」「緑」

植物系低血圧ガール。その日のテンションによつて髪型が変わる（自己申告）。

160cm、葉っぱを使った占いが趣味。

三年生：課外授業がある、先生とチームを組む

・ロロロ 本名 Lololo「Avenger」「」

フレッドの去年のバディ、美人で優しい変人。名前の発音は「」です。

162cm、さくらんぼの茎を舌で結べます！

・レイ 本名 Ray「Silverio」「黄」

秘宝奪還任務のリーダー、現在行方不明。体に巻き付く長髪がトレードマーク。

171cm、髪の毛は全長234cm！

先生：卒業生も多い、三年生2、3名とチームを組む

・アカヒゲ 本名 Akahige Musclemight 「赤」

国語教師。43歳、黒いひげのナイスミドル、言葉遣いは温厚だが怒るととても怖い。

・グリーン 本名 Green Smith 「緑」
美人保健医。21歳、分け隔てなく接する学園のオアシス。本当の年齢はトップシークレット。

【魔法の色】

> i 3 0 5 3 3 — 3 7 2 1 <

「赤」：フレッド、アカヒゲ

「緑」：グリーン、メローネ、アイリーフ

「黄」：エルザ、レイ、モカ

「青」：サイダー、サラサ

「白」：先天的な素質によってのみ発現する色。

「黒」：闇に落ちた魔法使いが染まる色。

【地図】

> i 3 0 5 2 8 — 3 7 2 1 <

アレクサンドリア王国：極寒の地に構える魔法王国。外交が途絶えて久しい。

イリシア帝国：大陸一の人口と国土を保有する。

ウルスラ民国：大陸二の〃。イリシアと衝突を繰り返している。

エン共和国：遊牧民族を主体に構成された商業国家。

オークロット領：魔法学園がある土地。中立的立場にある。

22・りんごみかん姫

22・

今日の風は乾いている。

帯びた熱風が真夏の熱気と共に二人の来訪者を学園に運んだ。

二人はこの日、職員室に呼び出された。

邪悪な「黒」の魔法使いとして学園中に悪名を響かせている一年生シロ。

もう一人は女癖の悪さに定評のある二年生「赤」の魔法剣士フレッド。

彼らの前に立つのは魔法学園で数学と物理を教えている教師ヒースガルド。

「青」の魔法使い、二十八歳独身のこの男が眼鏡をくいつと直してから淡々とした口調で言った。

「本日付けで女の子が一人、お前たちのバディに加わる。仲良くしてやれ」

バディを組んで早四ヶ月となるこの二人組は、圧倒的女子在籍率を誇るオークロット魔法学園において唯一の男同士のバディである。ただでさえ問題を抱えるこの二人組は、そういった取り合わせからも一際悪目立ちしている。

フレッドはともかく、一年生のシロの方は極めて素行も良く通常な

らば問題視されるような生徒ではない。

では何が問題なのかというと、ただ「黒」の魔法使いとしてこの学園の門を叩いたこと。

「黒」の魔法使いは須く危険であることを歴史が物語る。

魔法使いの四色。

これは多種多様に存在する魔法使いをおおきく四つのタイプに分類する際に用いられる色のことである。

「赤」は火属性、リーダーシップを発揮する人間に宿る色。

「青」は水属性、冷静沈着な司令塔タイプに宿る色。

「緑」は植物と平和を象徴する色であり、

「黄」色は安定と秩序を象徴する色とされている。

これらは性格診断等のような明確な基準を持たないものではなく、魔法史が始まった頃から存在する厳格なるルールである。

ではシロが持つ「黒」色とはなにか。

イメージ通り「黒」は暗黒や混沌を象徴する色で、歴代の「黒」の魔法使い達も全員が破滅思想を持つ危険な存在ばかりであった。故に彼は危険分子として扱われている。

しかし上述の通り、現状は何も問題を起こしたりしない勉強熱心な生徒に過ぎない彼がどうして「黒」なのか。

その真相はいまだ闇に包まれたままだ。

そんな状況に置かれているシロを指差しながら意気揚々と話し出す二年生フレッド。

「そんなわけでお前はもうお払い箱だ。長い間だったが楽しかったぜ」

先輩から告げられた言葉に、彼はいつもの調子で注釈を入れる。

「それを言うなら『短い間』じゃないですか？」

「だって長かったんだもん。しょうがねーじゃん」

「半年も経ってないのに長い間扱いですか。どんだけイヤだったんですか僕のこと」

教師からの突然の女子加入宣告に胸が高鳴るフレッド。

そしてシロは若干不安げな表情を作りつつも、かつて彼に見放されそうになった時のような悲壮感は無い。

この男が傍にいなければ何も出来ないようなダメダメな生徒だった彼は、いくつもの試練を乗り越えて一皮も二皮も成長した。

この男と行動を共にしてきた期間が彼をそうさせているのは間違いない。

「私が話している最中だ。口を慎め」

「はい」

再度眼鏡を掛け直し、声のトーンを一段落としたヒースガルドの一言に今日はやけに大人しく従うフレッド。

この男の頭の中は新しく入ってくる女子生徒のことでいっぱいだ。教師の言うことを素直に聞いておくのが一番手っ取り早くその女子に会える方法であることを分かっているのだ。

気持ち悪いくらい聞き分けの良いフレッドと、その後輩シロを眺める眼鏡の教師。

その眼鏡が不気味な光を湛えた時、眼鏡の下にくっ付いていたくちびるが口角をやや吊り上げて話し始めた。

「断つとくが今のバディは解消しないぞ。しばらくの間、三人編成になってもらっただけだ」

「げっ」という言葉が漏れる。

「残念でしたね、先輩」

満面の笑みで話しかけるシロ。

その笑顔が気に入らなかったのか、シロに近い利き手とは逆の手で軽く頭を小突く。

ぷくつとふくれた頭のこぶをさする一年生を横目にフレッドが返事を催促してきた。

「それで、その女の子はどこにいるんだ？」

「この子がそうだ。自己紹介を」

教師ヒースガルドが目線を下げ、その子に挨拶を促す。

呼ばれたその少女は隠れていた教師の後ろからひょっこりと顔を出した。

想像していたよりもずっとずっと背が低いその少女は…、本当にものすごく背が低かった。

ヒースの腰周りほどまでの身長にフワフワの緑色のベレー帽を被っている赤髪のちいさな女の子。

まるでリンゴのような出で立ちのその女の子は、眼を丸くしているフレッドとシロを上目遣いで見つめながら緊張した面持ちで名前を名乗った。

「アップル＝オレンジフィールドです。六才です。よろしくおねがいします」

「園児じゃねーか！」

激昂するフレッド。

いきなりの大音声にシロと、アップルと名乗る少女はびくりと肩を震わせる。

それに対しさすがは「青」の教師、ヒースガルドはテンションを変えずに答えた。

「食べ物をも温めるのに使う『赤』と『黄』色の魔法技術を使った調理機器。」

最近では『青』の力も混ぜ合わせてカロリーを減らす技術まで取り入れた代物がある鉄製の箱」

「それレンジ。」

漫才やってる場合じゃねーよ、どういことだ一体」

フレッドの疑問ももっともだ。

というのもまずはこのミシディア大陸における教育制度の仕組みから説明する必要があるだろう。

おぎやあとこの世に生を受けた子供達は、七歳になると国が定めた法によって正しい教育を受ける義務が与えられる。

その教育の期間は前半が六年間、後半が三年間に分けられている。

この九年間は男女平等に、魔法使いであろうとなかろうと関係なくすべての人間が同じ制度の下で教育を受けることができる。

そこから先の進路は大きく三つに分けられる。

教育を受けず働きに出るか、学問を修めるための普通高校に進学するか、はたまた魔法学園に進学するかの三通りの道に。

要するに魔法学園の存在以外、僕たちの世界と同じってことだね！

ヒースガルドは学園物のお話によくある展開を取り入れて端的に説明する。

「飛び級ってやつだ。魔法の開花が早すぎて他の園児と一緒に置いとけないんだ。」

ほら、何かの弾みで暴発でもしたら危ないだろ？」

「俺達は危なくないのかよ」とふてくされる様子のフレッド。

その隣で彼の後輩のシロもまた、一抹の不安を覚える表情を浮かべ

ている。

そんな彼らの様子を、アップルと名乗る少女はまばたきを繰り返しながら交互にじーっと見つめている。

「くそー、わざわざ俺達のバディに入れるっつー時点で怪しいとは思っていたんだよ」

待望の女の子が加入したというのに気分が晴れないフレッド。それもそのはず。

人にはそれぞれ好みというものがある。

この男は学園でも無類の好色として名が知れ渡っている生徒であるわけだが、別に女なら誰彼構わず見境が無い訳ではない。

フレッドが公言するストライクゾーンは自分の年齢から±4歳程度。

さらに詳細に書き出すとより大人の女性がタイプであり、結婚するなら絶対に年上の女性と決めている。

女子生徒のハーレムを作ると常日頃から触れ回っているのは、女子高生（年下）は本命では無いから数でカバーする作戦で行こうとしているだけ。とのことらしい。

そんな彼にとつて年上の二十六歳ならまだしも、十も歳が離れた幼子などペットと同じレベルの愛情しか感じないのだと言っ

「っーかシロといいこの娘といい、完全に厄介払いだろこれ。俺は物置き部屋じゃねーんだぞ」

一度ならず二度までも。

望みどおりの展開が訪れなくてついに不満をぶちまけるフレッド。教師ヒースガルドはそんな彼を突き放すようにトドメの言葉を刺し

た。

「安心しろ、お前も十分厄介者だ」

ギロリとにらみつけるフレッド。

その少女はすっかり怯えきった様子でフレッドの目を見つめている。

「……いや、でもあと五年もしたら美少女になつてるオーラはあるな」
アップルの容姿を眺めつつも女好きの本能が働き、齢六つの女兒の値踏みを始めるフレッド。

キレイに切り揃えられた前髪にルビーレッドの澄んだ瞳。
みずみずしい肌。

身の危険を感じてか、少女の瞳がややみずみずしく変化していく。

「その子の色は『赤』だ。何かあったときはよろしくな」

最後にアップルの属性を伝え、ヒースガルドはそそくさと職員室の奥へと引き下がっていった。

魔法使いの四色は生まれつき決まっているとされている。

断定を避けたのは確定していないから。

魔法使いとしての色が決まる時期は個人によって大きく異なるのだ。
母体の中で炎に包まれて産まれてくる者もいれば、シロのように色が判明しないまま魔法学園に入学してくる輩さえいる。
だが。

一般的にはおむつが取れるくらいの年頃には大体の人間の色、すなわち属性が判明しているものだ。

アップルに関しては名前だけでなく、髪や瞳、着ている服まで全てが赤い。

魔法使いの四色は生まれ持ったの体質だけでなく、本人の好みまで

もその色に染め上げてしまう性質があるという。
髪の色や、本来変えようのない目の色だけでなく。
彼女が好んで着用している赤いワンピースもまた「赤」に生まれた
者が特別に好む色足り得るのだ。

と。

その時、アップルと名乗る少女が動いた。
とてととと拙い足取りで歩き出し、絶望に沈むフレッドの脇を通り
過ぎ、その後ろにいるシロの元へ辿り着く。

「お兄ちゃん」

シロのことを。

小さな口を開いて恐る恐るそう呼んで、小さな手でズボンをつか
んで傍らに寄り添う。

ぎゅつとか弱くも力強く握られたその握力は彼の庇護欲を刺激する
のに一役買った。

「なつかれちゃいましたね」

シロは目の前の状況に困惑する。

そして途惑いながらも、自分に好意を寄せて近づいて来てくれる女
の子を愛おしく思い、そつと頭をなでてあげた。

触れた頭はとても小さくて。

林檎のような真っ赤な髪の毛は指の間に入り込みクシャクシャと鳴
った。

その様子を見たフレッドも負けじと立ち直る。

そして。

「よろしくな」

と、少女の目線に合わせて屈み込み、頭を撫でようと手を伸ばす。

するとアップルはその手を避けるようにシロの背後へと回り込み、さつきよりも強くズボンを握り締めながら挨拶を返した。

「よろしくなー」

強くなつた彼女の握力に比例して彼の保護欲も高まってゆく。

「可愛いですね、アップルちゃん」にやけ顔が止まらないシロ。

「なんかあんまり可愛くねー」フレッドは解せないという表情を作る。

「なんだか妹が一人増えたみたいだ。よろしくねアップルちゃん」

シロは膝を曲げて彼女の視線に合わせ、笑顔のまま彼女の肩に手を置いた。

アップルはほつぺたまで林檎のように真っ赤に染めながら今度は親しげに言い返してきた。

「アップルね、シロお兄ちゃんのこと好きー」

「うん。こちらこそよろしくね」

こうして二人はすぐに打ち解けあつた。

女嫌いのシロもさすがに小さい子が相手なら大丈夫な様子で仲良くじゃれあっている。

しかしその様子を面白くない顔で眺めている男がここに一人いた。そんな彼の神経を逆撫でするかのごとく、とある一人の教師が肩を叩いて話しかけてきた。

「すまんが、その愉快的な顔の君」

「あゝ！？」

嫌味たつぷりな口の利き方をしてくる相手にぞんざいな対応をするフレッド。

そこに立っていたのは。

「言い忘れていたことがある」、と断りを入れて再びやってきた教師ヒースガルド。

「先にお前さんにだけ伝えとくよ。黒髪君の方にはあとでお前の口から…」

なんだ？

不思議そうに思いながらもフレッドは、ヒースガルドの手招きによつてアップルとシロから一旦遠ざけられる。

距離を置いたところで教師は、彼女の耳に入らぬようにと右手でジェスチャーを交えながら耳打ちした。

「さっきの話の続きだが。

飛び級でこの学園に来させたと話したがそれはアップルの手前、脚色を交えた嘘話だ。

凄い魔力を持っている事は確かだが事実はいさ少し違う」

職員室に緊迫した空気が流れるのを肌で感じ取れる。

数名の教師が素知らぬ振りをしつつもしっかりと聞き耳を立てていることも。

アップルがこの学園に招かれた本当の理由とは一体。

固唾を呑むフレッド。

そしてヒースガルドの口から今、真実が語られる。

「あの子の住んでいた山間の小さな村が、原因不明の山火事で一夜にして全焼した。

アップルは村唯一の生き残りだ」

続く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8008u/>

黒の魔法使い

2012年1月13日19時55分発行